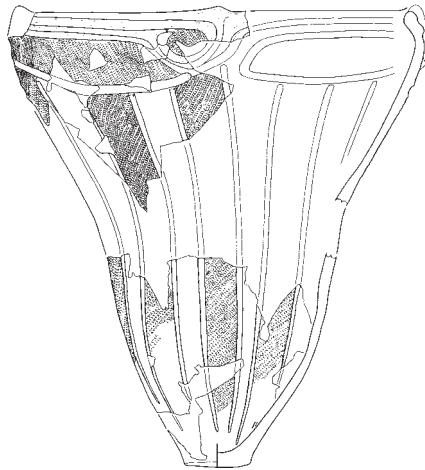


てらのだい
市原市寺ノ台遺跡 第2次



2012

K D D I 株 式 会 社
市 原 市 教 育 委 員 会

序 文

市原市は、房総半島のほぼ中央に位置し、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれております。そのため、有史以来多くの人々の生活がこの地で営まれ、郷土の歴史が育まれてきました。史跡上総国分寺跡や「王賜」銘鉄剣などに代表される国内有数の文化遺産の数々は、これら先人の足跡を今に伝えています。

本報告書は、携帯電話基地局の建設に伴い発掘調査がなされた「寺ノ台遺跡」の成果をまとめたものです。市内を縦貫する養老川の上流域において、調査事例の少ない縄文時代中期後半の集落遺跡を調査し、貴重な成果を記録することができました。

本書が、学術資料としてはもとより、多くの方々が郷土の歴史への関心を高め、埋蔵文化財の保護と重要性を理解していただくための資料として、広く活用されることを願っています。

最後に、発掘調査から本報告書の刊行にいたるまでご指導ならびにご協力をいただきましたKDDI株式会社、千葉県教育庁文化財課をはじめ関係諸機関各位に、心からお礼申し上げます。

平成24年3月

市原市教育委員会
教育長 山崎 正夫

例言

- 1 本書は、千葉県市原市月崎字初崎 1093 番 1 に所在する寺ノ台遺跡第 2 次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業・報告書編集刊行は、KDDI 株式会社の計画する携帯電話基地局の建設に伴い、同社の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもと、市原市教育委員会生涯学習部の市原市埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 本報告書所収の調査は下記の通りである。
本調査（調査コード セ 468）調査面積 158.76 m²
調査期間：平成 22 年 10 月 20 日～同年 11 月 11 日 調査担当：牧野光隆
整理作業
期間：平成 23 年 11 月 1 日～平成 24 年 2 月 24 日 担当：牧野
- 4 本書の編集・執筆は、牧野が担当した。
- 5 図中に示した座標値は日本測地系（平面直角座標第 IX 系）であり、全体図中の 1 点に世界測地系変換座標（TKY2JGD ver1.3.79 による）を記した。

本文目次

第 1 章 調査の経過と概要	1	第 3 章 調査の方法と成果	5
第 1 節 調査に至る経緯		第 1 節 調査の方法	5
第 2 節 調査の概要		第 2 節 遺構と出土遺物	5
第 2 章 遺跡の位置と環境	1	(1) 竪穴建物跡	5
第 1 節 地理的環境		(2) 土坑	15
第 2 節 歴史的環境		(3) ピット	18
		(4) 遺構外出土遺物	18
		第 4 章 総括	20

挿図目次

第 1 図 調査遺跡位置図	2
第 2 図 寺ノ台遺跡周辺地形図	3
第 3 図 寺ノ台遺跡第 2 次調査区全体図	4
第 4 図 SI01・SI03・SI04 実測図	6
第 5 図 SI01・SI03・SI04 出土遺物分布図	7
第 6 図 SI01 出土遺物 (1)	8
第 7 図 SI01 出土遺物 (2)	9
第 8 図 SI03・SI04 出土遺物	10
第 9 図 SI01 出土遺物 (3)	11
第 10 図 SI02・SK04 実測図、 SI02 出土遺物 (1)	12
第 11 図 SI02 出土遺物 (2)、SK04 出土遺物	13
第 12 図 SK01・SP01～SP04 実測図、 SK01 出土遺物	14
第 13 図 SP01～SP04 出土遺物、 SK02・SK03 実測図・出土遺物	15
第 14 図 K1・K2(樹木等痕跡) 出土遺物	16
第 15 図 調査区一括出土遺物 (1)	17
第 16 図 調査区一括出土遺物 (2)	18
第 17 図 調査区一括出土遺物 (3)	19

図版目次

図版 1 調査区全景・SI01 遺物出土状況・SI03
図版 2 SI01 炉・SI03・SI04
図版 3 SI02・SK01・SK02・SK03
図版 4 SK04・SP01・SP02・K1・調査区全景
図版 5 SI01・SI02・SI03・K1 出土遺物
図版 6 SI01・SI03・SI04 出土遺物
図版 7 SI02・SK01～SK04・SP01～SP04・ K1 出土遺物
図版 8 K1・K2・調査区一括出土遺物
図版 9 調査区一括出土遺物、各遺構出土石器

表目次

第 1 表 遺構名称新旧対照表	4
第 2 表 石器観察表	19

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経緯

KDDI 株式会社がこの地で無線基地局建設の計画を立案し、平成 22 年 6 月 23 日付「埋蔵文化財発掘の届出について」がサンワコムシスエンジニアリング株式会社より提出された。台地上は縄文時代の埋蔵文化財包蔵地である寺ノ台遺跡（市原市埋蔵文化財分布地図番号 20）として周知されており、すでに平成 5 年の 1 次調査時の成果（未整理）もあるため、同年 7 月 6 日、工事着手前に調査を必要とする旨通知した。協議の結果、鉄塔基礎およびその周囲計 158.76 m²について、記録保存の方向で本調査を実施することになった。平成 22 年 10 月 20 日より、本調査を開始した。

第2節 調査の概要

当該地は、台地の南端縁辺部であり緩斜面のため、表土が薄く耕作の影響が甚大であった。そのため、ソフトローム層とその上層土に漸移層がほとんどみられず、遺構の上層部分は消失していた。

検出した遺構は、竪穴建物跡 4 軒、小竪穴状土坑 1 基、土坑 4 基、ピット 6 基である。出土した土器から、土地の利用は縄文時代早期前葉・中葉・後半、前期、中期前半を経て、中期後半の加曽利 E Ⅲ式期にピークとなり、後期以降はほぼみられなくなることがみてとれた。台地上にひろがると考えられる規模の大きい集落の縁辺部であり、この部分に関しては、竪穴建物の規模や使用状況、石器の出土状況などから判断して、狩猟基地としての役割が想定される。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第 1・2 図）

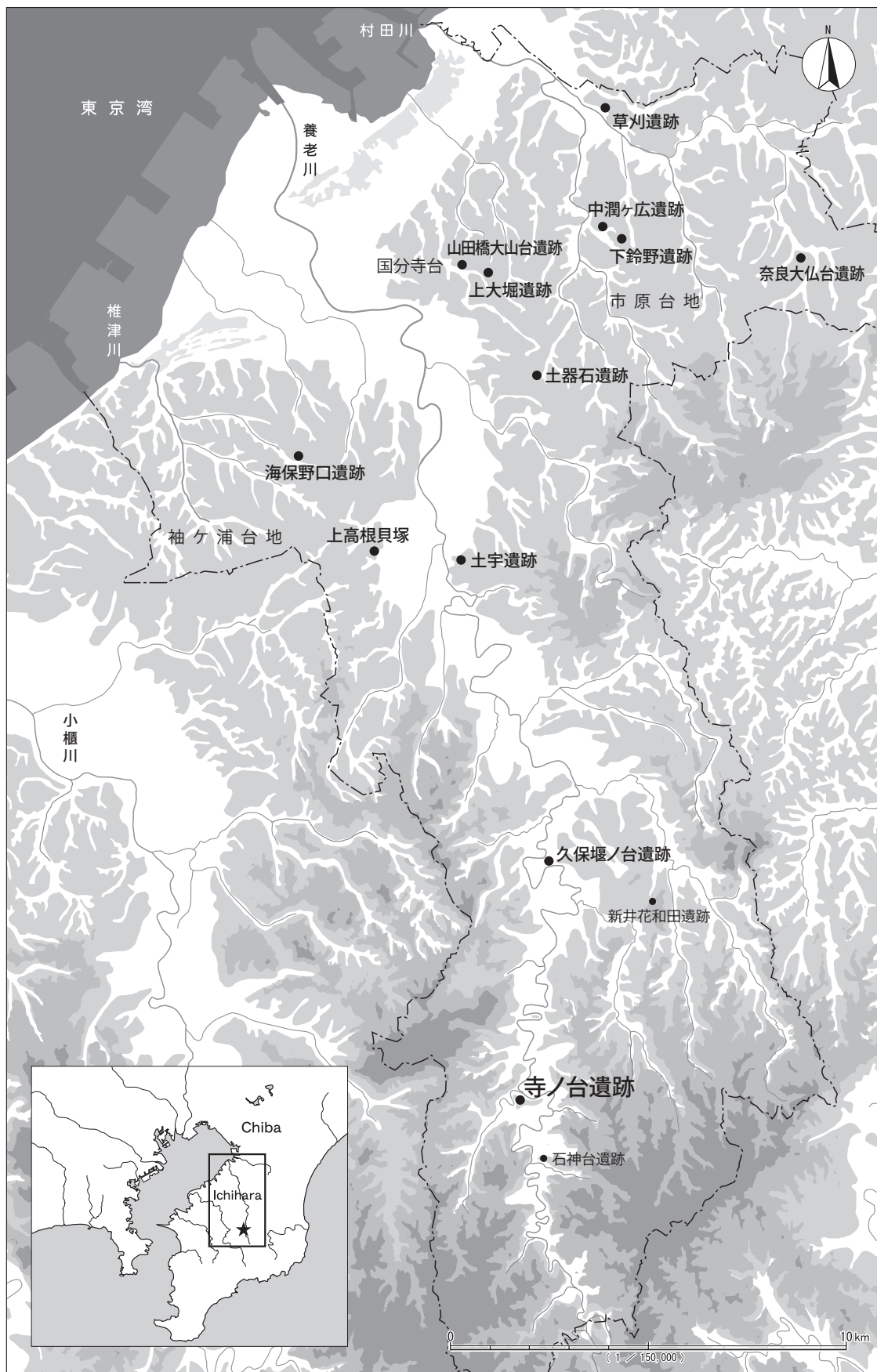
当地は市域の南部に位置し、東京湾側の姉崎海岸まで直線距離で約 22km、反対方向の勝浦の海岸までが約 23km であり、房総半島の中央付近と言える場所である。

遺跡は、蛇行しながら北へと流れる養老川に浦白川が流れ込む合流点に面し、両河川に開析された独立台地上に位置する。台地の平面形状は、先端が東を向く二等辺三角形を呈しており、上部平坦面の面積はおおよそ 29,600 m²である。台地上の標高は 95 m 前後であり、北面する養老川水面との比高差は約 52 m と急峻な地形である。南側の段丘面には月崎の集落があり、約 30 m の比高差を有する。今回調査区はこの三角状台地の南西端部分にあたる。

第2節 歴史的環境（第 1・2 図）

この三角形の台地上は、永昌寺の境内地となっている。墓域の拡大に伴う平成 6 年の調査では、竪穴建物跡 3 軒と土坑 4 基が検出されており、竪穴建物跡 3 軒には、それぞれ大形土器を炉体とした炉がみられた。整理報告は未了である。その他、耕作などで採取された大形石棒数点や化石化したクジラの椎骨などが永昌寺にて保管されており、縄文時代中期後半の遺跡として周知されている。

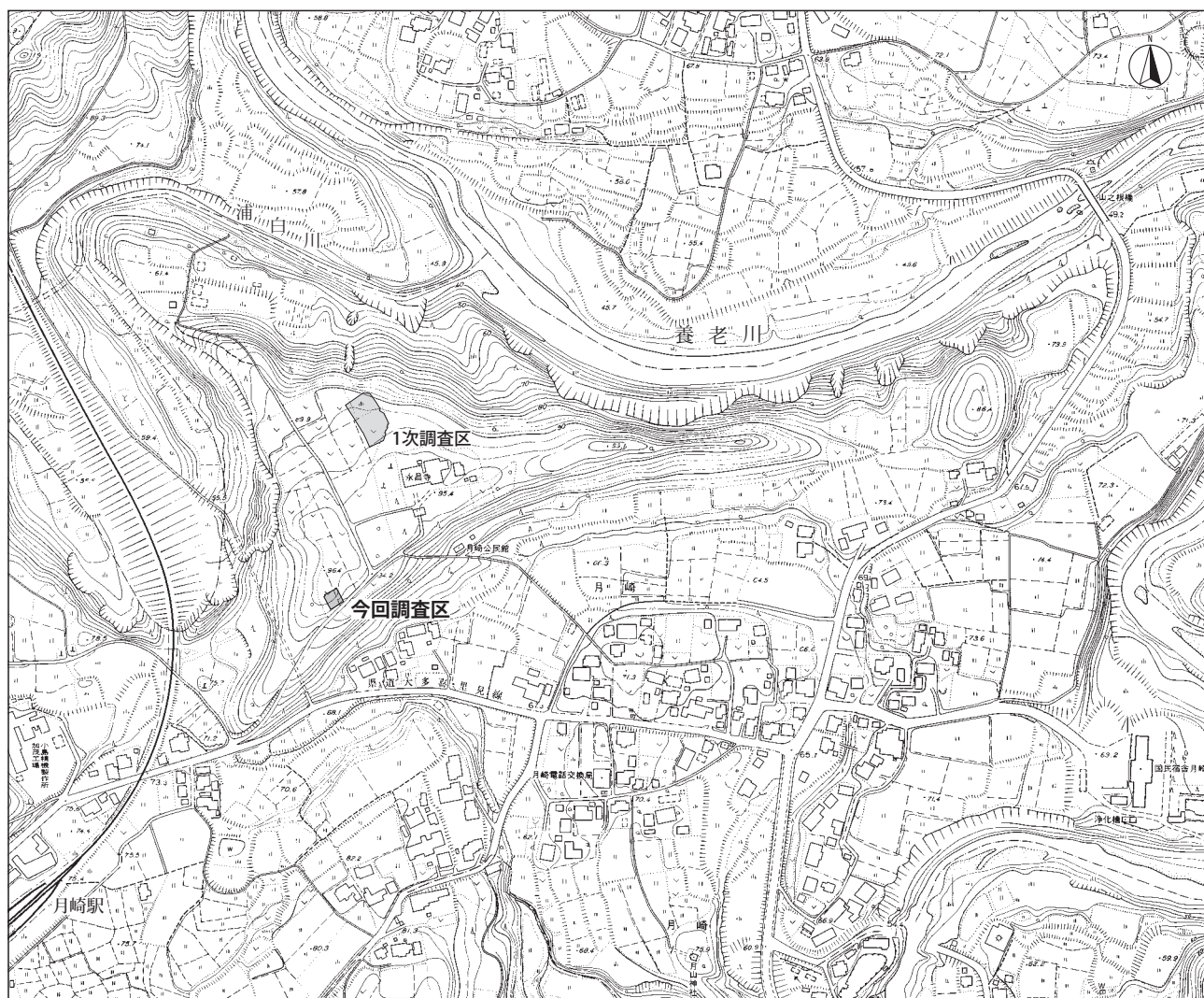
周辺を広くみると、市域南部は開発が少ないこともあり、調査事例が市域北半ほど多くない。そのため、今回の調査と同様、遺跡の全体規模が把握されていない場合が多い。いくつかの大規模な調査事例として、新井浄水場の建設による花和田遺跡の調査では、早期後葉子母口～野島式期の独立丘陵上の集落跡が検出されている。周辺には部分的な調査でも早期後半の条痕文期の遺物がみられることが多く、市域南部の丘陵上には広く当該期の生活が及んでいたものとみられる。また、昨年度の圏央



第1図 調査遺跡位置図

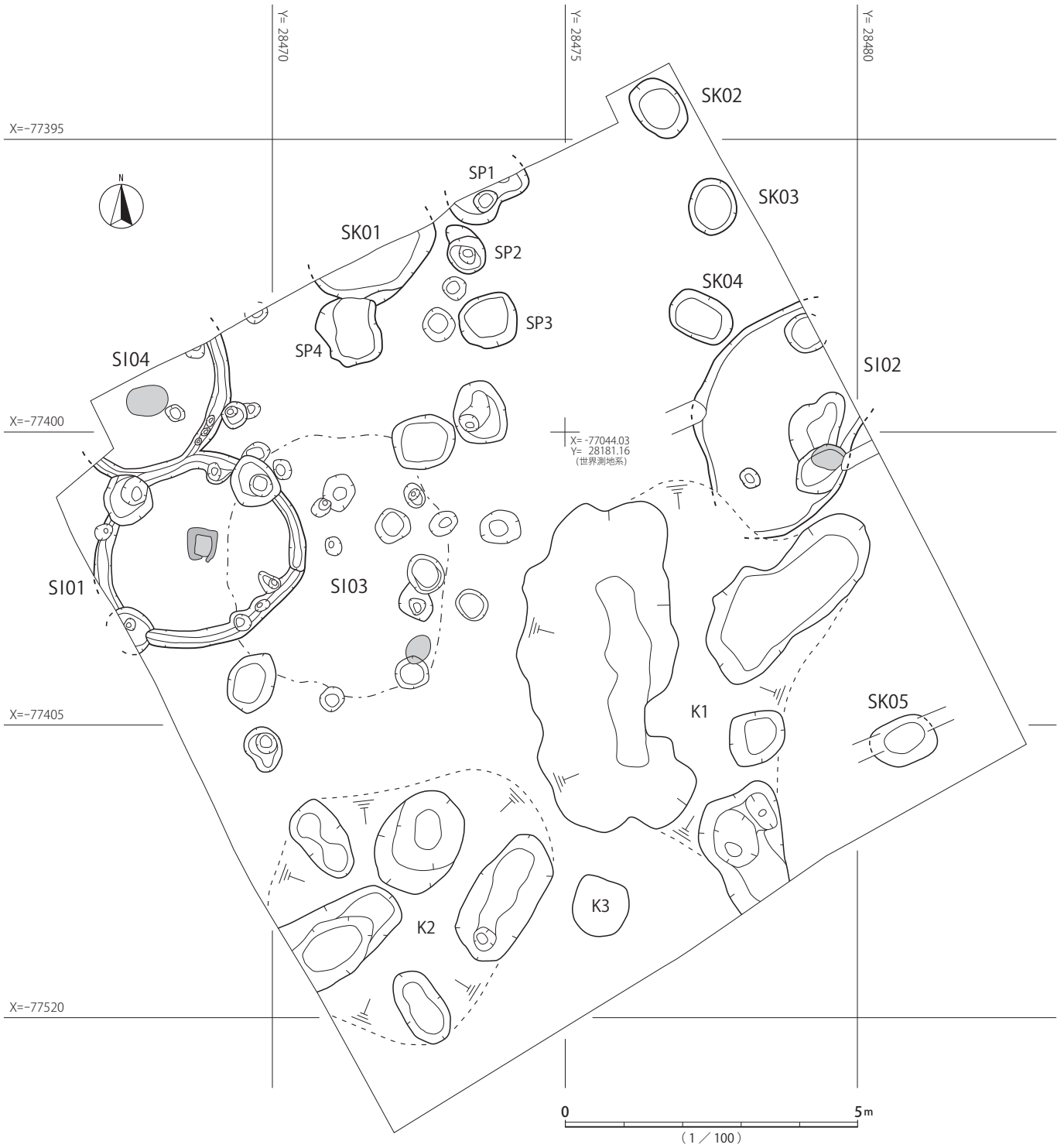
道関連の久保堰ノ台遺跡の調査では、中期後半とされる竪穴建物跡が30軒を超える規模で検出された集落跡の調査がなされている。寺ノ台遺跡から北に6kmほど離れているが、時期的に並行存続する大規模な集落とみられ、整理報告が待たれる。寺ノ台遺跡から南に1.6kmの石神台遺跡では、道路建設に伴い、後期～晩期にかけての竪穴建物跡や溝跡が調査され、異形台付土器・玉類・土偶・石剣などの祭祀遺物が出土している。関西系・東北系の晩期土器もみられ、交易圏の広さが窺われる。

市域北半部には、寺ノ台遺跡に近い時期とみられる小規模な集落跡が多数調査されている。養老川中流域では、集落規模の比較的大きい土宇遺跡や海保野口遺跡、上高根貝塚などが知られる。寺ノ台遺跡から真北に18.4kmの土器石遺跡（調査報告時名称「武士遺跡」）は、中期後半期の竪穴建物跡が77軒検出されている大規模集落であり、まさしく当時の拠点集落と言える。その後、後期堀之内式期に集落規模がピークを迎えたとみられ、227軒を調査している。また、東京湾を望む台地上の国分寺台地区の祇園原貝塚や西広貝塚をはじめ、その東方に点在する山田橋大山台遺跡や上大堀遺跡、中潤ヶ広遺跡・下鈴野遺跡・奈良大仏台遺跡などは、それぞれ数軒の竪穴建物が散在するような遺構密度の低い状況が調査によって判明している。このことは、時期的な傾向とみられている。



(市原市基本図 1/2500、昭和55年測図より)

第2図 寺ノ台遺跡周辺地形図



第3図 寺ノ台遺跡第2次調査区全体図

第1表 遺構名称新旧対照表

報告名称	調査時名称	報告名称	調査時名称	報告名称	調査時名称	報告名称	調査時名称
SI01	SI01	SI03P14	P17	SK03	P21	K2	SK02
SI01P3	P9	SI03P15	P16	SK04	SK04	K2	SK03
SI02	SI02	SI03P16	P18	SP01	P1	K2	P12
SI03	SI03	SI03P18	P10	SP02	P2	K2	K1
SI03P1	P6	SI03P19	P11	SP03	P3	K2	K6
SI03P2	P5	SI03P20	P7	SP04	P4	K3	K3
SI03P5	P8	SI04	SI04	K1	SK05	報告外	K2
SI03P6	P19	SI04P2	P15	K1	SK06		
SI03P12	P14	SK01	SK01	K1	K4		
SI03P13	P13	SK02	P20	K1	K5		

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

現況は畑地であり、現表土層を重機で掘り下げたところ、遺構確認面は耕作等によってかなりの攪乱を受けていることが観察された。そのため、遺物包含層部分はほとんど原位置を保持していないことと、調査区が12.6 m四方と狭いことから、調査区にグリッドを設定しない方法で調査を行った。

遺構名称は検出順に付したため、整理報告段階で一部変更した(第1表参照)。出土土器は時期別に分類し、重量を計測した。出土土器の時期区分については、第4章で記述する。

第2節 遺構と出土遺物

(1) 竪穴建物跡

S I O 1 (第4～7・9図、図版1・2・4・5・6・9)

規模：3.55 × 3.36m **壁高**：0cm **壁周溝**：幅20～30cm・深さ5.5～22.0cm **柱穴・その他ピットの深さ**：P1 43.1cm・P2 27.7cm・P3 43.0cm・P4 30.2cm・P5 57.4cm・P6 38.0cm・P7 59.6cm

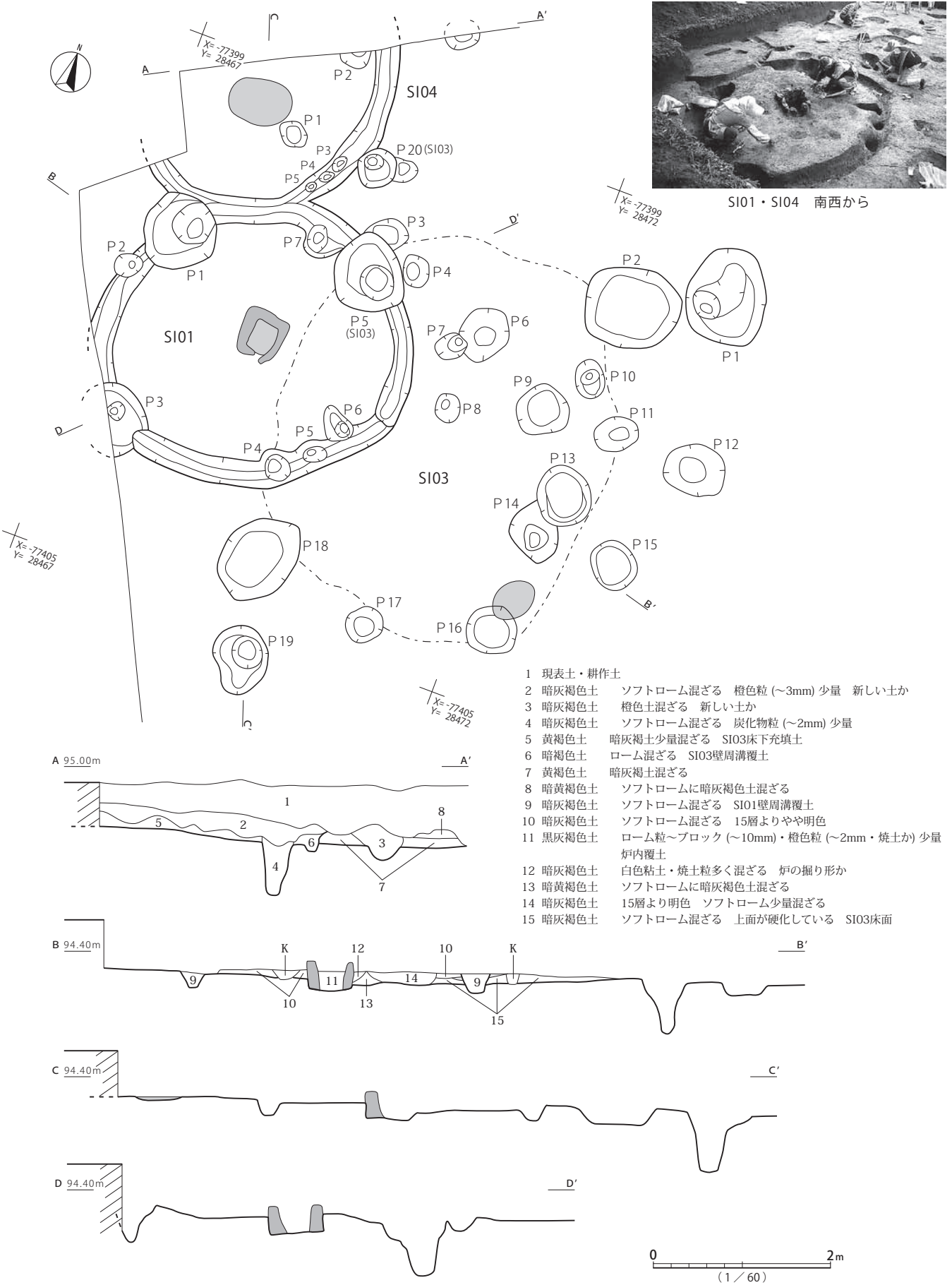
遺物量：土器17,439g(中期後半14,339g、早期後葉588gほか)・石6,069.1g(掲載石器の他、黒曜石剥片91点63.3g、その他石材剥片2点42.2g、被熱礫104点3,069g、自然礫40点2,358gほか)

所見：円形の竪穴に壁周溝が巡らされる。竪穴内部に柱穴やピットはみられず、床面の硬化も観察されない。P1・P3・P5は壁周溝の幅に比して大きく、覆土観察からもSIO1に伴うものであるかどうかの判断は難しいが、壁周溝ライン上に配置されているため、SIO1のピットとして含めた。

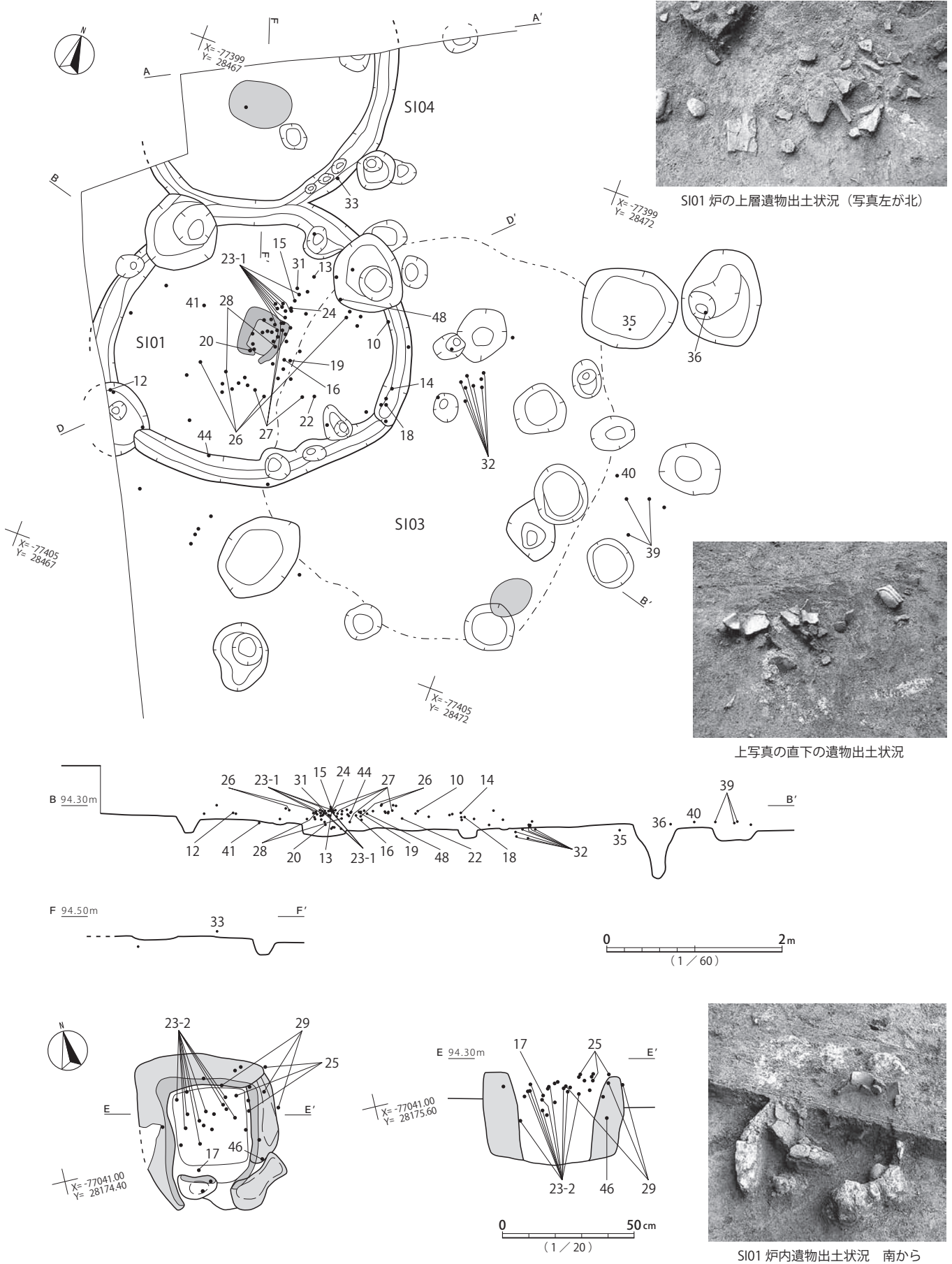
竪穴の中央部に独自の炉を有する。炉壁には白色粘土が用いられ、炉壁の厚さ8～15cmで口の字型に構築される。外形規模は南北方向の長軸58cm、東西方向の短軸53cmである。南側の炉壁の一部が開放もしくは崩れていたが、それが使用当初の状態であったかどうかは判断できない。ただ、反対面の北側壁は比較的しっかりと厚く作られている。竪穴の平面空間的にみても、炉の周囲は若干南側と西側が広く、南側から炉に対面する構造であったと考えてもよさそうである。そのように想定した時のSIO1の主軸方位はほぼ真北を指向する。床面積は6.08 m²と小規模である。

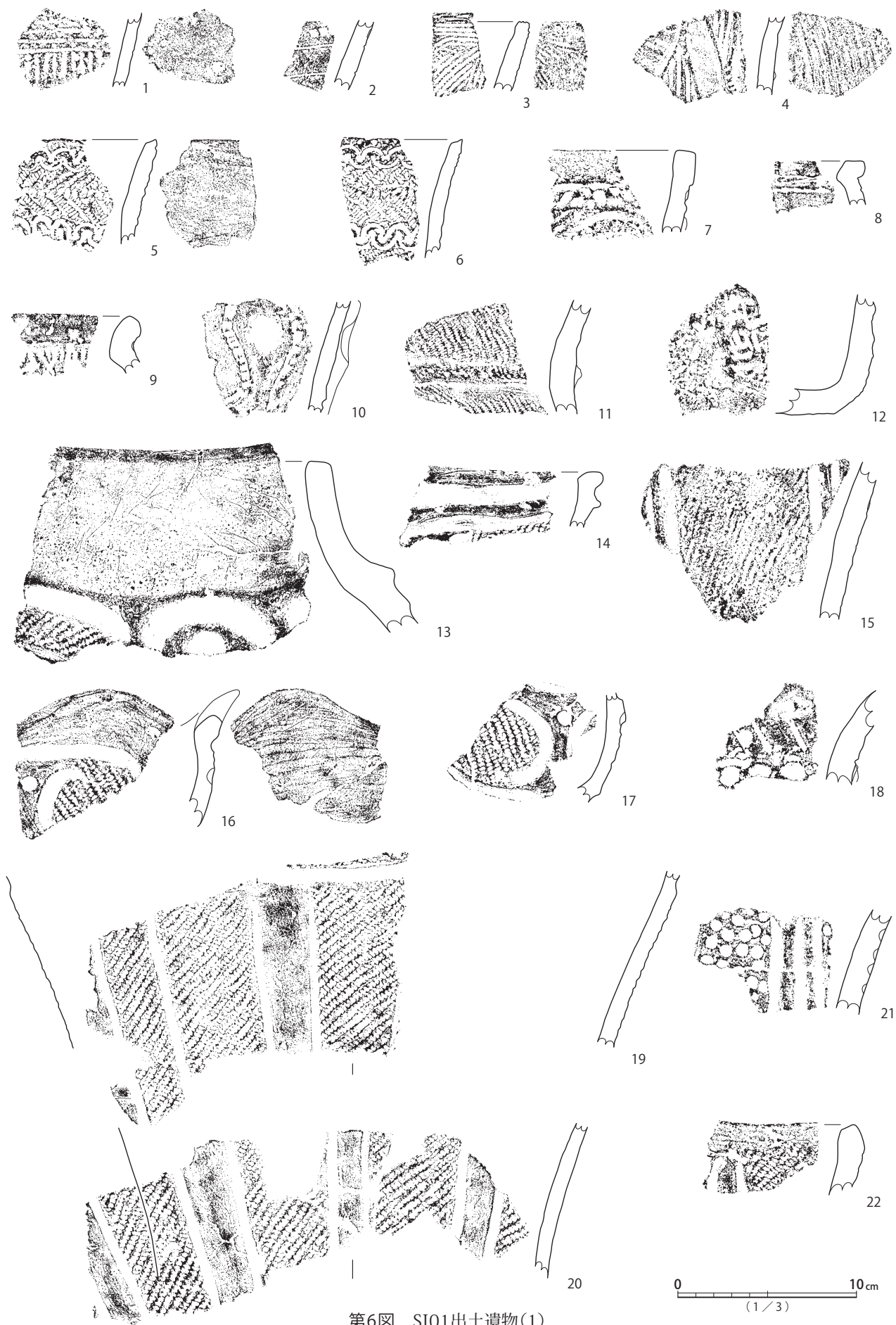
炉壁の上面から掘り形底面までの深さは35.8cmである。炉壁内面は熱を受け赤化した様子が観察された。被熱の影響は著しいものではなく、この炉が長期に渡って使われていた印象はない。炉内の覆土には顕著な焼土がみられず、黒褐色土が主体となり土器片が多くみられた。このことは、炉にたまった焼土を意図的に処分し、廃絶したものとも考えられる。炉内覆土及びその周辺には土器片が集中しており、炉を意識して廃棄した様子がみてとれる。

出土遺物は、第6図1・2が早期中葉、3・4が早期後葉、5・6が前期前半、7～12が中期前半、13～29は中期後半とみられる。このうち、16・17・19・20・23～29が、炉とその周辺から出土している。16と17、19と20、24から29にかけてはそれぞれ同一個体とみられる。特に炉内に入り込んでいた23の土器は口が大きく開くキャリパー型であり、横位の口縁部文様帯とその直下の磨消縄文帯との区画関係が崩れつつある加曽利EⅢ式古段階(以下、「加曽利」を略す)の特徴を示す。16・17はさらに文様帯の崩れが進むEⅢ式新段階にあたり、22は横位文様帯が消失したEⅣ式期にかかる。18は斜行文と隆線を有する曽利系土器であるが、小片しかみられない。30・31は土器片加工円盤、43は加工痕のある剥片、48は形状から石斧と推定した。

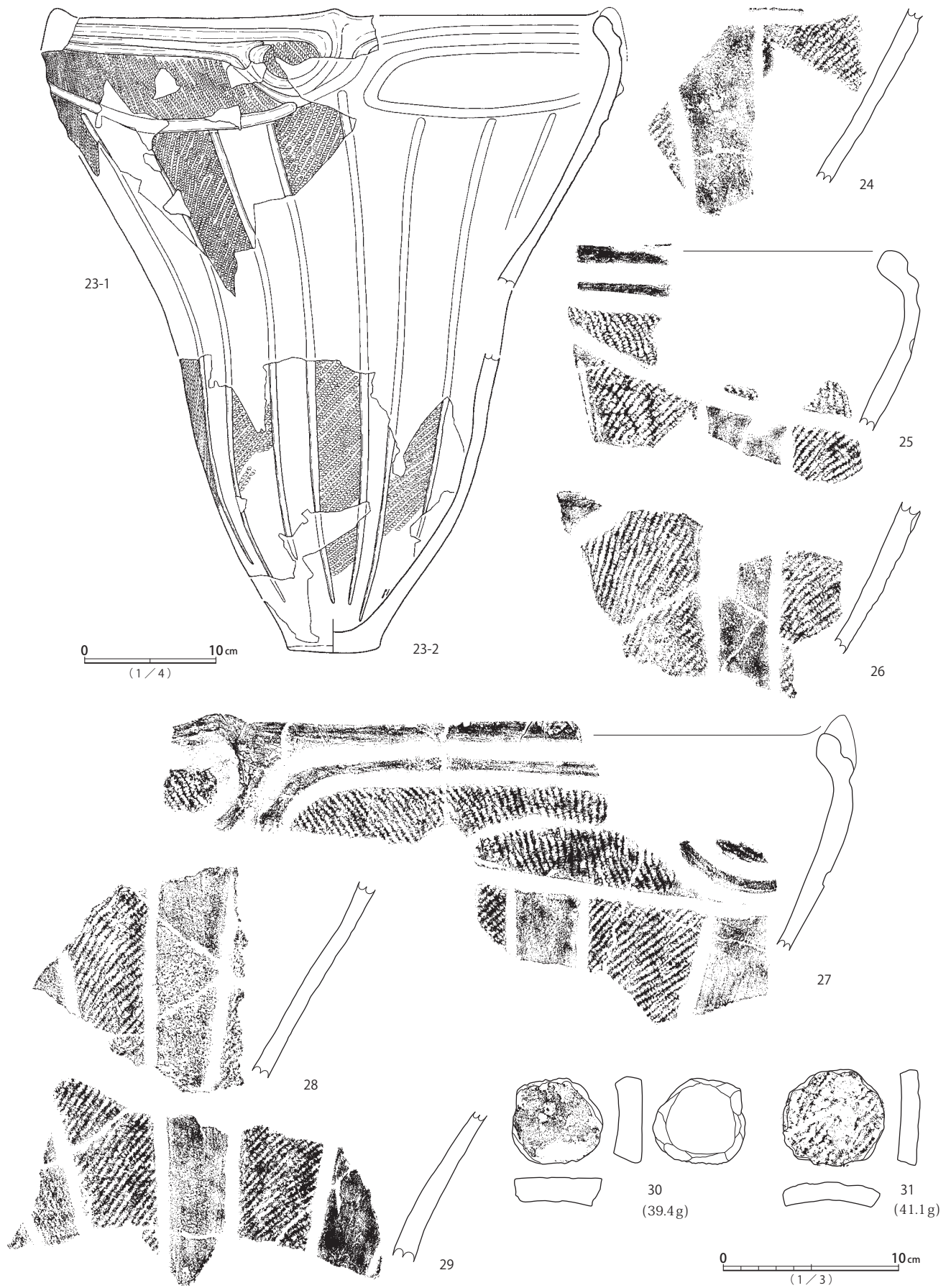


第4図 SI01・SI03・SI04実測図

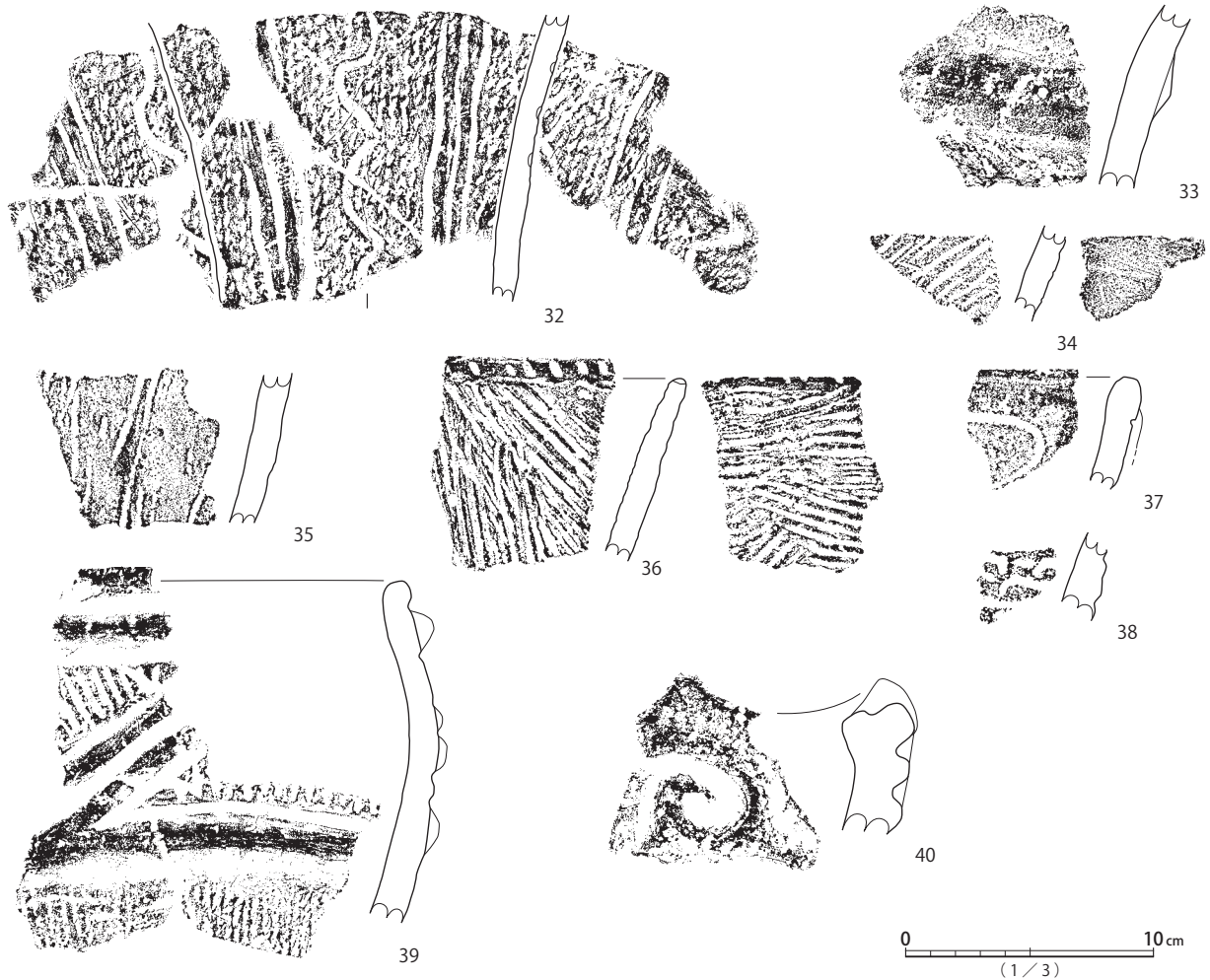




第6图 SI01出土遺物(1)



第7图 SI01出土遺物(2)



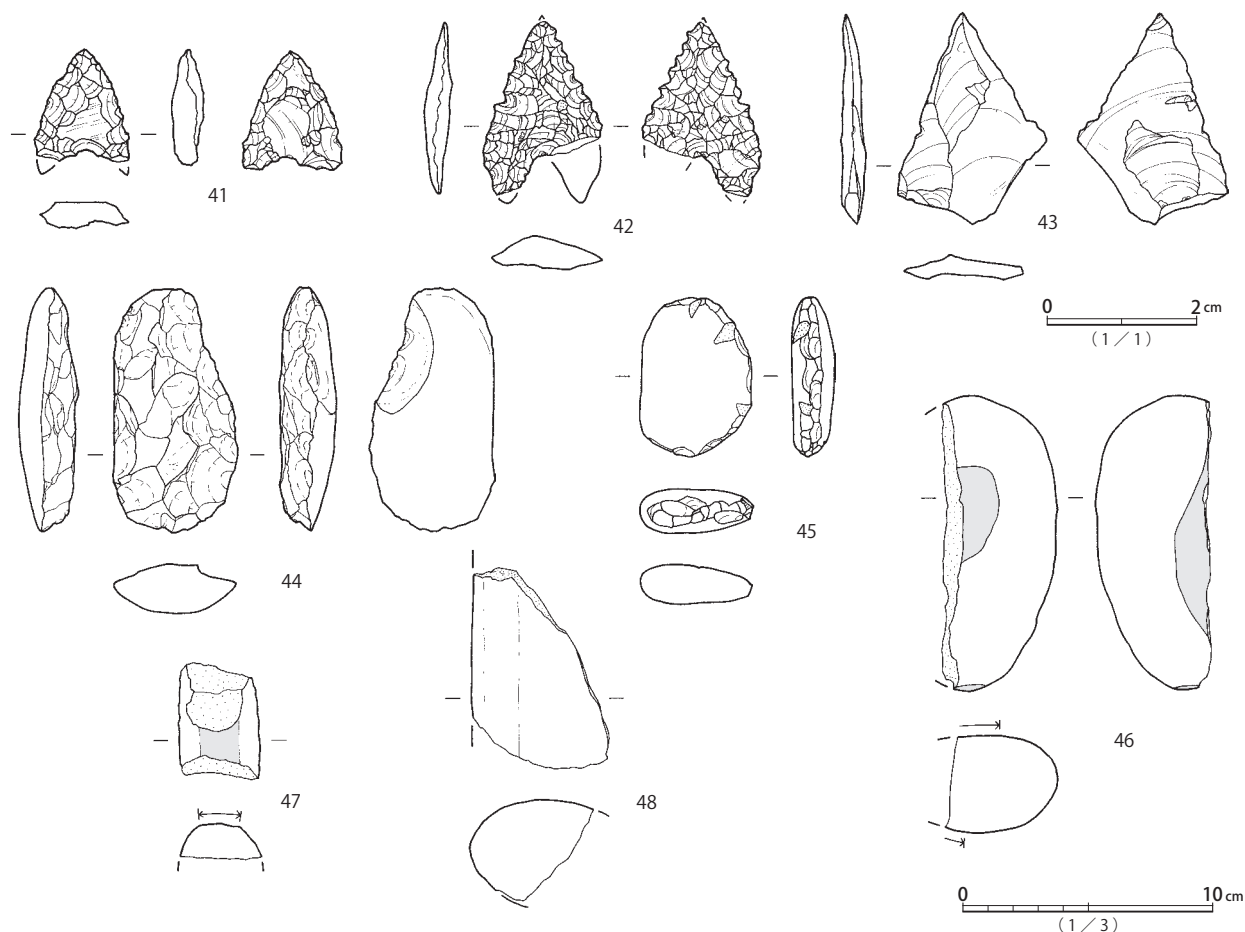
第8図 SI03・SI04出土遺物

SI03 (第4・5・8図、図版1・2・4・5・6)

規模：7×6m (推定)・硬化面部分 4.5×3.7m 壁高：0cm 壁周溝：なし 柱穴・その他ピットの深さ：P1 29.9cm・P2 14.4cm・P3 8.6cm・P4 12.4cm・P5 55.1cm・P6 27.1cm・P7 23.7cm・P8 16.2cm・P9 16.1cm・P10 31.5cm・P11 14.0cm・P12 17.0cm・P13 25.8cm・P14 61.5cm・P15 14.0cm・P16 12.6cm・P17 16.6cm・P18 18.9cm・P19 68.5cm・P20 40.9cm 遺物量：土器 705g(中期後半)・石 136.4g(黒曜石剥片 4点 3.4g、被熱礫 2点 74g、自然礫 1点 59g)

所見：硬化面のみが検出されたことから、壁の滅失した竪穴建物跡として捉えた。土層観察により、SI01 竪穴に切られていることから、古い段階の竪穴建物跡であることが判明した。硬化面の南東端に焼土の集中部分を確認したが、炉と呼べるような燃焼面はみられなかった。

周辺にはピットが多数確認されたが、すべてが伴うものではないとみられる。ピットの覆土観察では、P2・P12・P13が黒褐色、それ以外のピットが暗灰褐色土にソフトロームが混ざる覆土であり、これら2種類の覆土が認められたが、樹木による攪乱も多く判別は困難であるため、SI03のピットとした。また、明確にSI03に伴うとみられる出土遺物は少量であった。第8図32は3本1対の沈線と波状の懸垂文が垂下するEⅢ式新段階の特徴を示す。胴部上下を輪積みで水平に欠き、胎土が黄白色に発色しており、やや異質な感を受ける。39は横位文様帯が直線的に安定しており、胴部地文に撚糸を施文する。EⅢ式古段階以前とみることも可能であろう。40は隆帯による渦巻文がみられる。



第9図 SI01出土遺物(3)

34～38はピット内出土の遺物であり、35はP2出土で早期前葉稲荷台式期であろう。34はP13出土、36はP1出土で、早期後葉の条痕文系土器である。37・38はP19から出土している。

SI04 (第4・5・8図、図版1・2・4・6)

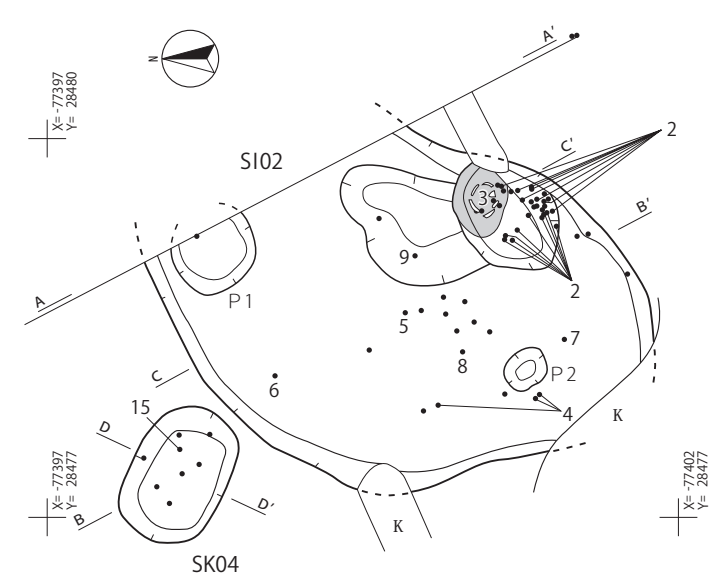
規模：3.1×3.0m(推定) **壁高**：0～14cm(調査区北壁面の土層断面で確認) **壁周溝**：幅22～33cm・深さ7.3～12.9cm **柱穴・その他ピットの深さ**：P1 9.2cm・P2 58.7cm・P3 22.7cm・P4 23.4cm・P5 23.3cm **遺物量**：土器124g(中期後半)・石245g(自然礫1点)

所見：SI01の北側に隣接し、壁周溝の一部が重なる。SI04の確認が遅れたため、新旧関係は判然としない。ただ、調査区北壁の土層断面(第4図A-A')からみて、覆土や床面は耕作により消失したものと観察された。炉跡は、黄褐色ソフトロームが被熱によって赤化した部分を検出したのみであり、燃焼面はさらに上層にあったとみられる。

出土遺物も少なく、図示できたのは第8図33のみである。太めの隆帯による文様描出が見られることから、EⅢ式古段階もしくはそれ以前と考えられる。

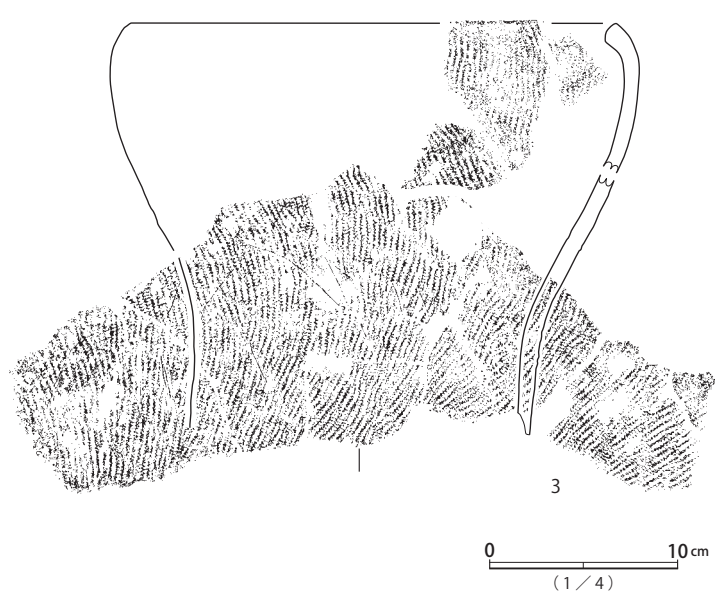
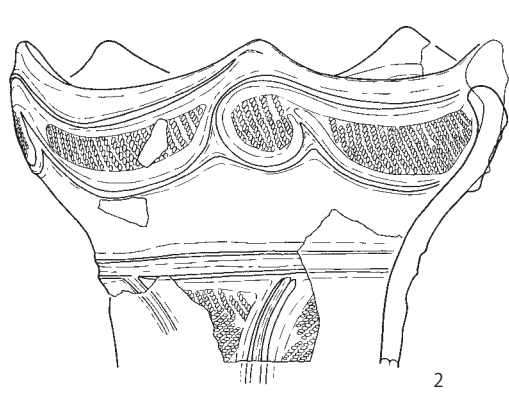
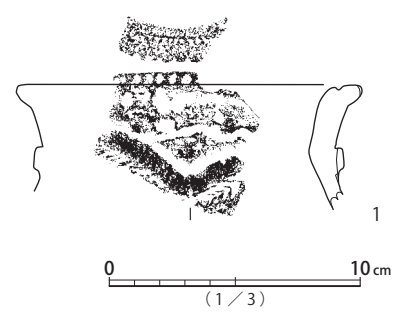
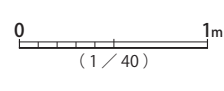
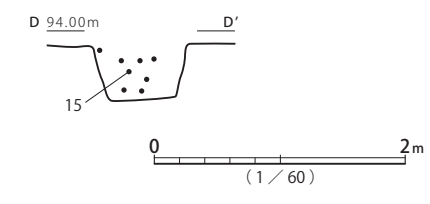
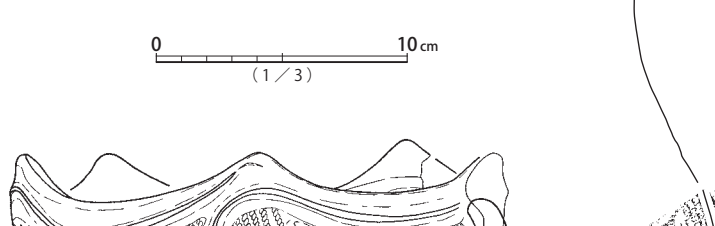
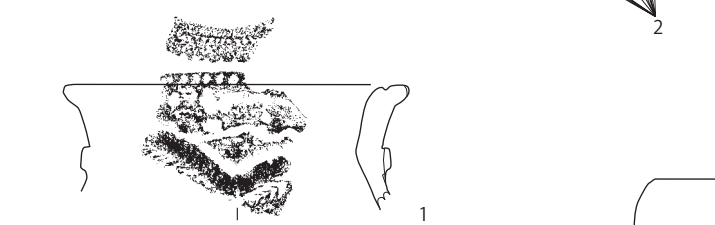
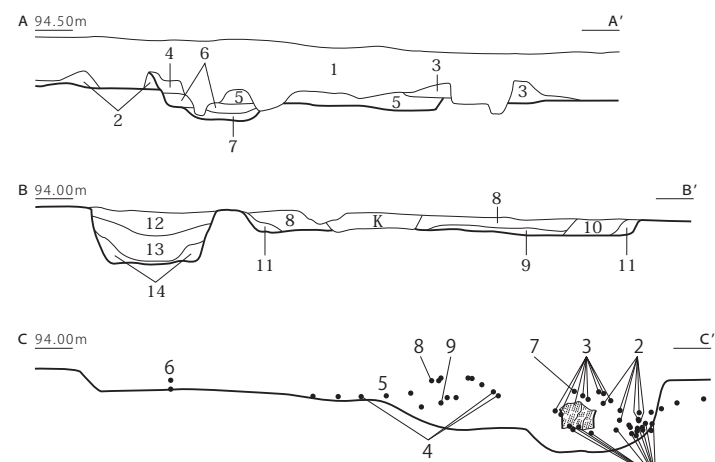
SI02 (第10・11図、図版1・3・4・5・7・9)

規模：4.5m(推定)×2.86m **壁高**：10.1～10.9cm **壁周溝**：なし **柱穴・その他ピットの深さ**：P1 13.7cm・P2 27.4cm **遺物量**：土器5,591g(中期後半5,287gほか)・石3,408.8g(黒曜石剥片11点10.2g、その他石材剥片1点15.1g、被熱礫51点2,267g、自然礫19点1,041gほか) **所見**：不整楕円形を呈し、竪穴建物と呼ぶには貧弱な規模である。南寄りの壁に近接して焼土の集中地点が確



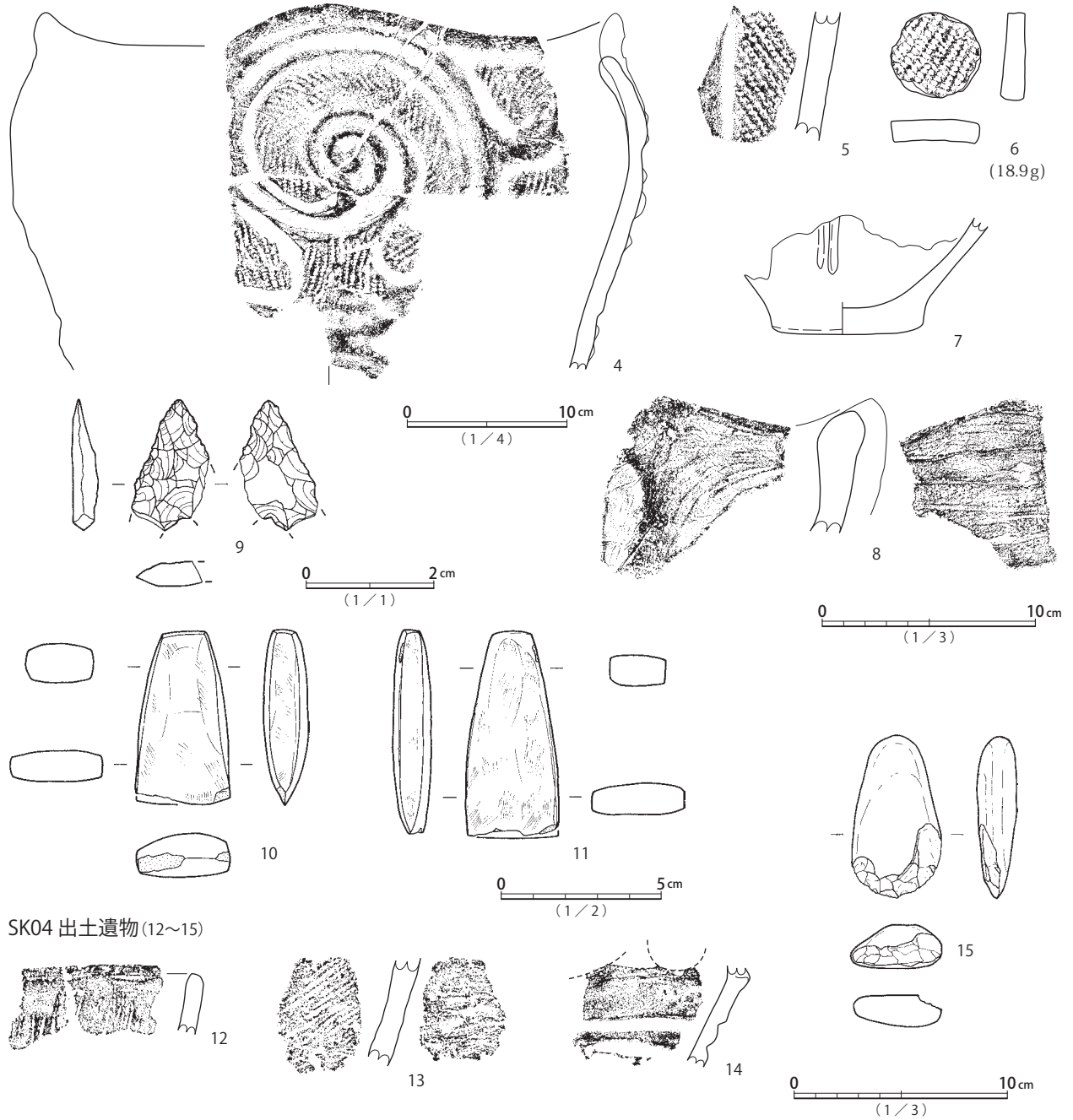
SI02 炉付近遺物出土状況 西から

- 1 現表土・耕作土
- 2 暗灰褐色土 ローム混ざる
- 3 暗灰褐色土 ローム少量混ざる
- 4 暗灰褐色土 ローム多い
- 5 暗灰褐色土 混ざり少ない
- 6 暗灰褐色土 4層よりローム多い
- 7 暗灰褐色土 ローム多い P1の底土
- 8 暗灰褐色土 ロームブロック (~10mm) 少量
- 9 8層 + ローム分
- 10 暗黄灰褐色土 ローム分多い
- 11 黄灰褐色土 ほとんどソフトローム
- 12 暗褐色土 ロームブロック (~5mm) 少量
- 13 暗灰褐色土 1層より明色 ローム分多く粘性強め
- 14 褐~暗褐色土 ロームブロック (~10mm) 多い SK04底土



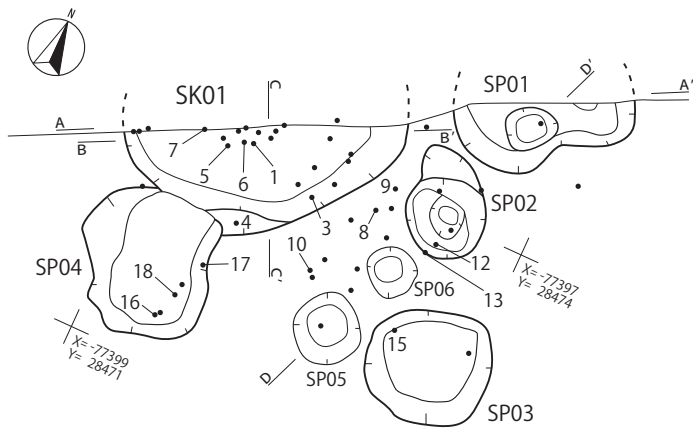
第10図 SI02・SK04実測図、SI02出土遺物(1)

SI02 出土遺物 (4~11)



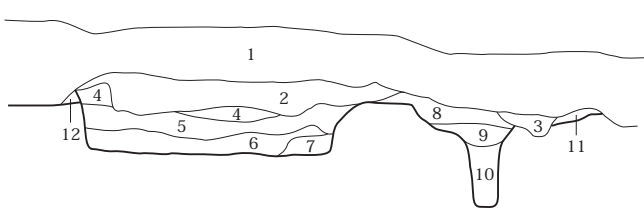
第11図 SI02出土遺物(2)、SK04出土遺物

認められ、第10図3の土器が据えられていた。底部は出土していない。焼面は検出されなかったが、炉であったとみられる。炉の掘り形も不整形であり、床面からの深さは22.5cmである。付近から2の波状口縁(推定5単位)の土器が出土している。大木8b式の影響を受けて成立したとみられる意匠充填系の土器であり、胴部には渦巻き文などが描かれる。口縁部の横位文様帯は弧線で描かれるが、その直下には空白帯がある。胴部に張りがないところはキャリパー型土器の影響も受けており、EⅢ式新段階とみてよいであろう。第11図4も同時期とみられる。5は複節縄文を地文とし、これは調査区全体でも数点の小片しかみられなかった。6は土器片加工円盤であり、第10図1は早期中葉田戸上層式期とみられる。第11図10・11は小形の磨製石斧である。調査区全体において道具系の石器が少ないなかで、ひとつの遺構からこの2点が出土したことは興味深い。

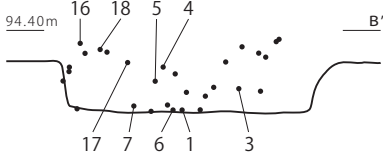


SK01 調査風景 南西から

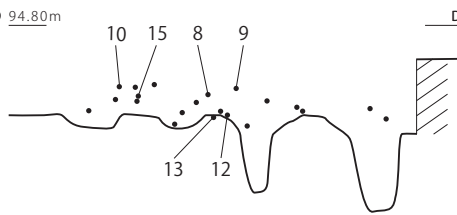
A 95.00m



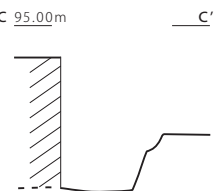
B 94.40m



D 94.80m



C 95.00m

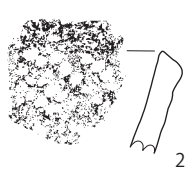


0 2m
(1/60)

- 1 現表土・耕作土
- 2 暗灰褐～黒灰褐色土 炭化物粒(～3mm)・ローム粒(～8mm)少量 新しい土か
- 3 黒褐色土 ロームが汚く混ざる 新しいか
- 4 暗灰褐色土 ローム混ざる 5層に近似
- 5 灰褐色土 ローム粒(～5mm)・ローム混ざる
- 6 灰褐色土 ロームブロック(～20mm)・ローム多く混ざる
- 7 5層に類似 混ざり少ない
- 8 暗灰褐色土 ロームが汚く混ざる
- 9 暗灰褐色土 ソフトローム混ざる
- 10 暗灰褐色土 9層より暗色
- 11 黄褐色土 灰褐色土混ざる
- 12 暗黄褐色土 ソフトロームに暗灰褐色土混ざる



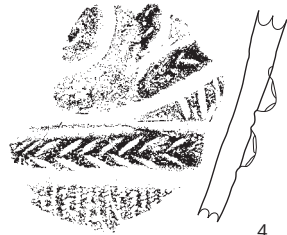
1



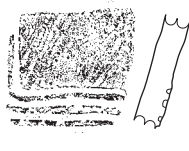
2



3



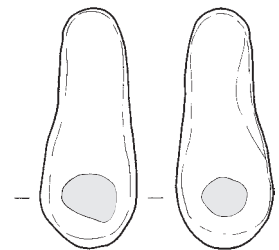
4



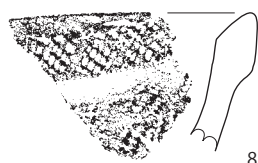
5



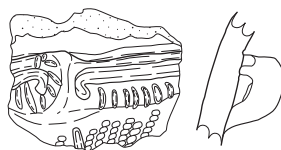
6



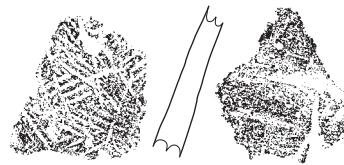
7



8



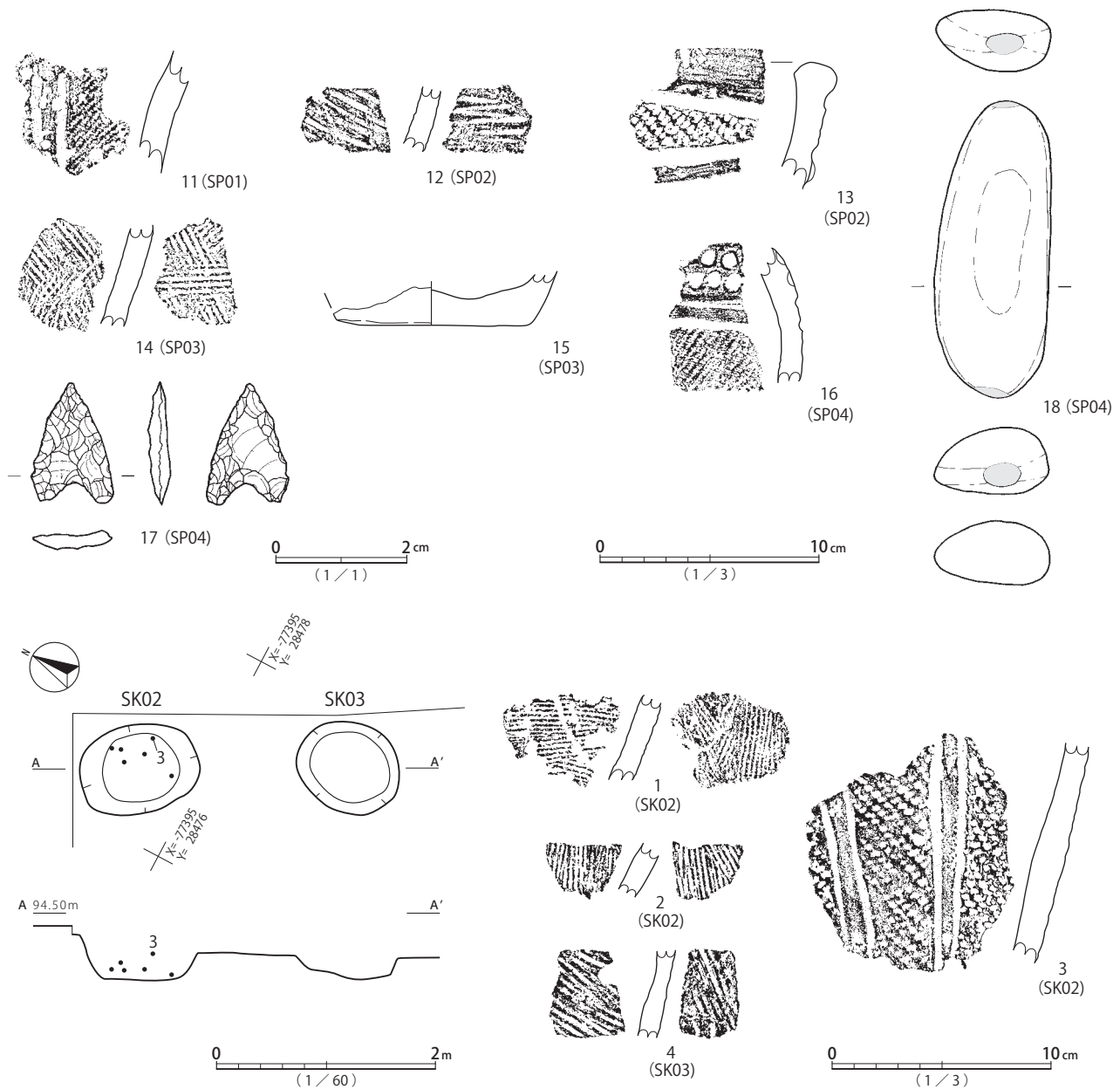
9



10

0 10cm
(1/3)

第12図 SK01・SP01～SP04実測図、SK01出土遺物



第13図 SP01～SP04出土遺物、SK02・SK03実測図・出土遺物

(2) 土坑

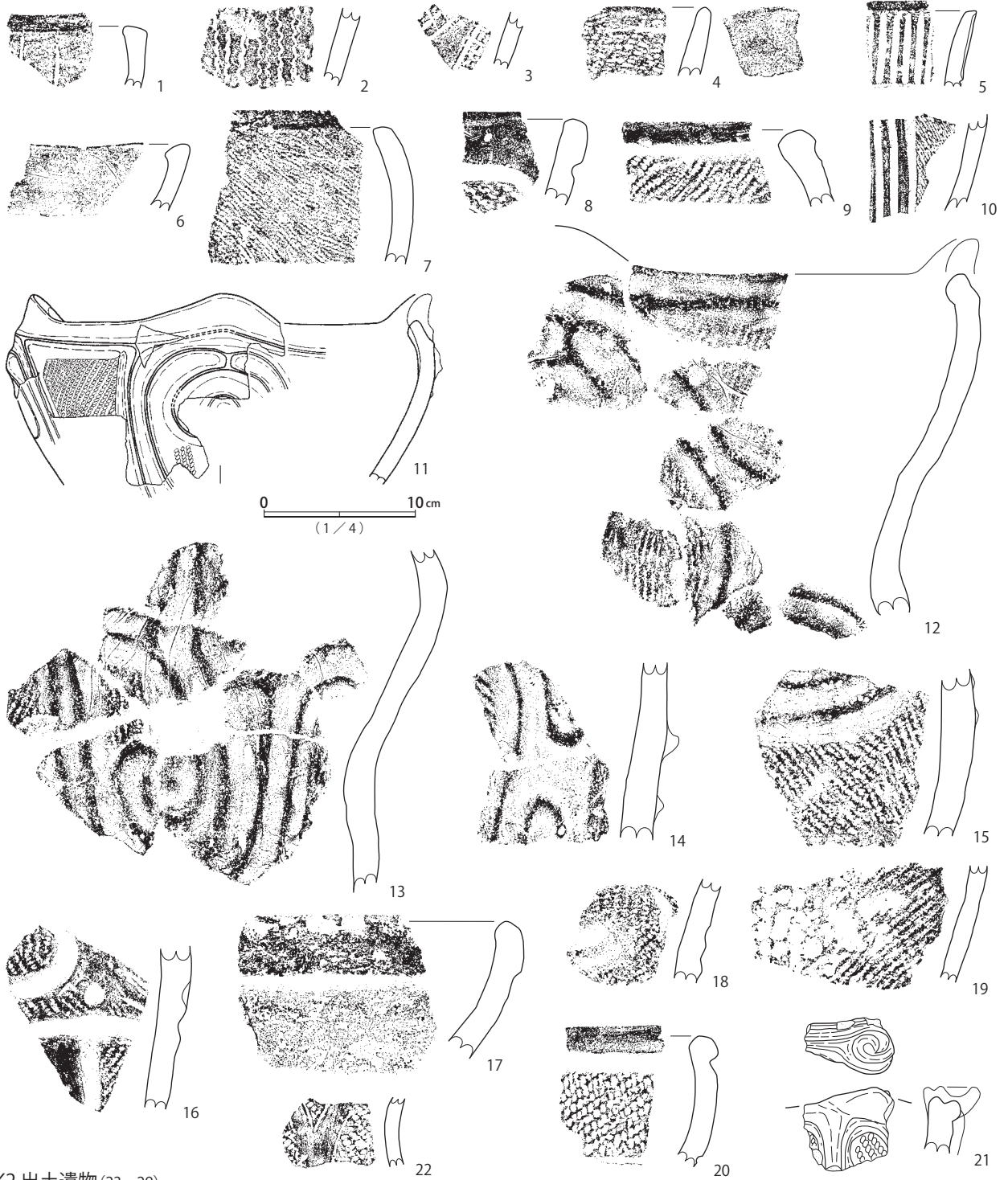
SK04 (第10・11図、図版3・4・7・9)

規模：1.12 × 0.76m **深さ**：47.3cm **主軸**：N-64°-W **出土遺物**：土器 456g(中期後半 153g、早期後葉 96g)・石 1,316.4g(黒曜石剥片 5点 4.1g、その他剥片 1点 0.3g、被熱礫 31点 1,230g、自然礫 3点 14g) **所見**：底面もしっかりとしたきれいな掘り込みの土坑である。第11図12・13のように早期の土器を含むが、中期後半の土器の出土量も多いことから、中期後半の土坑と考えられる。

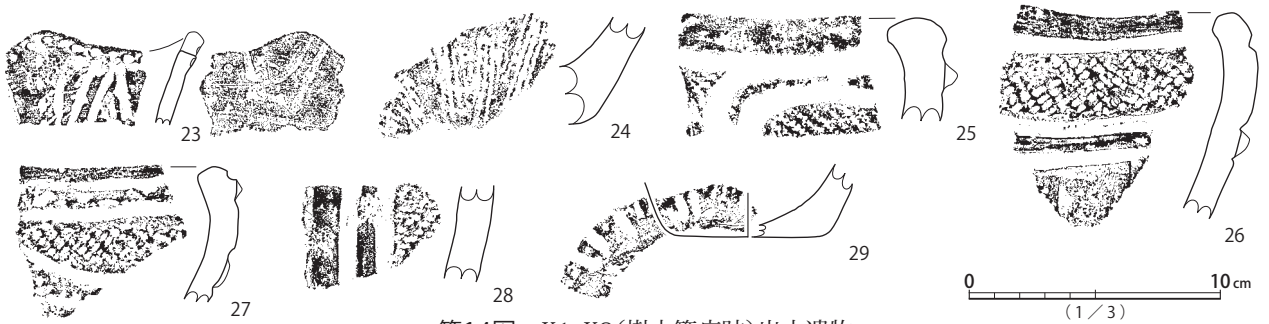
SK01 (第12図、図版3・7・9)

規模：2.23 × 2.1m (推定) **深さ**：39.0 ~ 45.3cm **出土遺物**：土器 1,319g(中期後半 797g、中期前半 226g)・石 1,277.5g(掲載石器の他、黒曜石剥片 9点 19.3g、その他剥片 1点 3.2g、被熱礫 17点 1,087g、自然礫 2点 30gを含む) **所見**：いわゆる小竪穴と呼ばれる類の遺構である。覆土は他の遺構よりもローム分が多く明色であり、第12図3・4・8・9のように胎土に雲母を多く含む阿玉

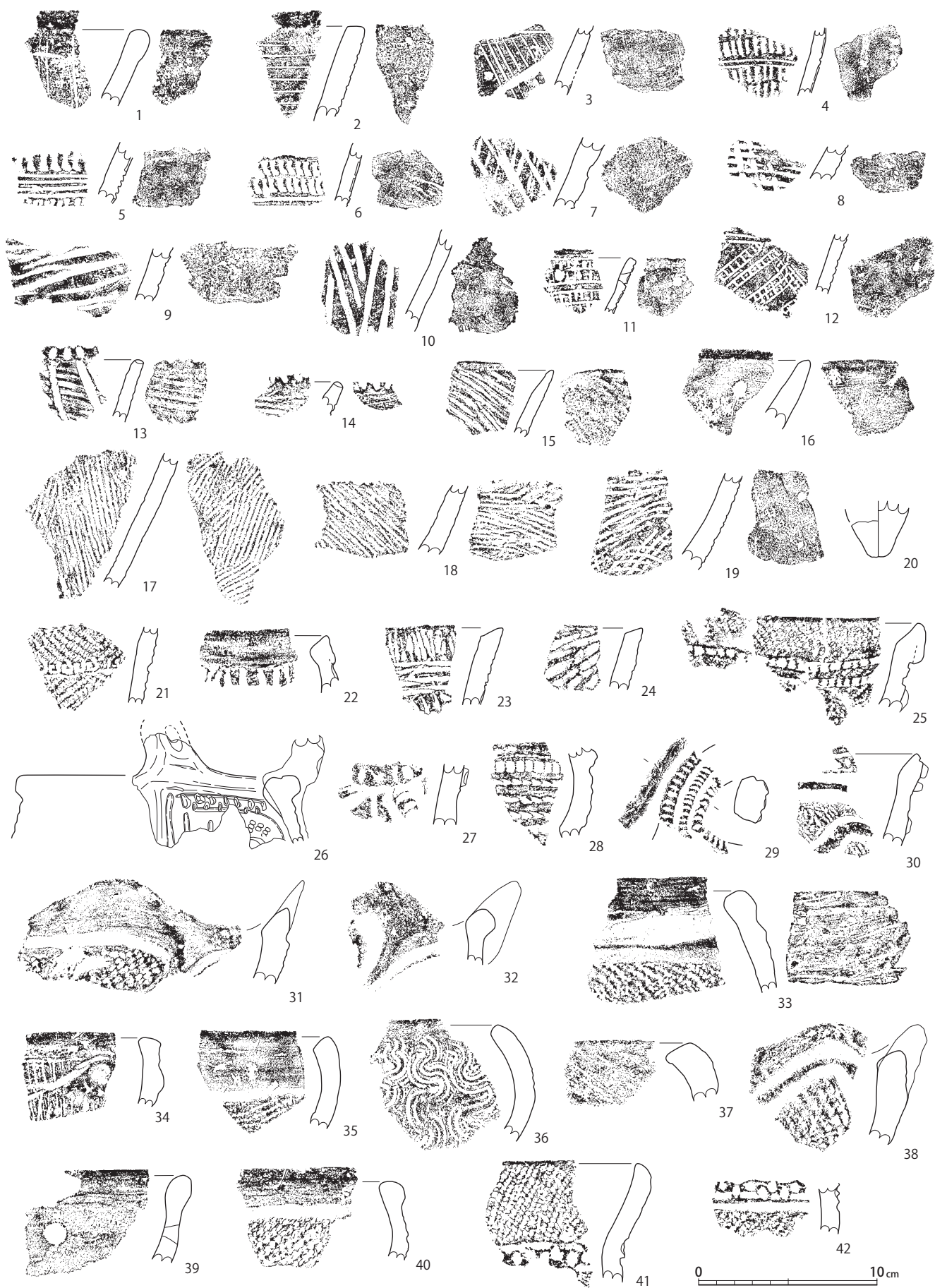
K1 出土遺物 (1~22)



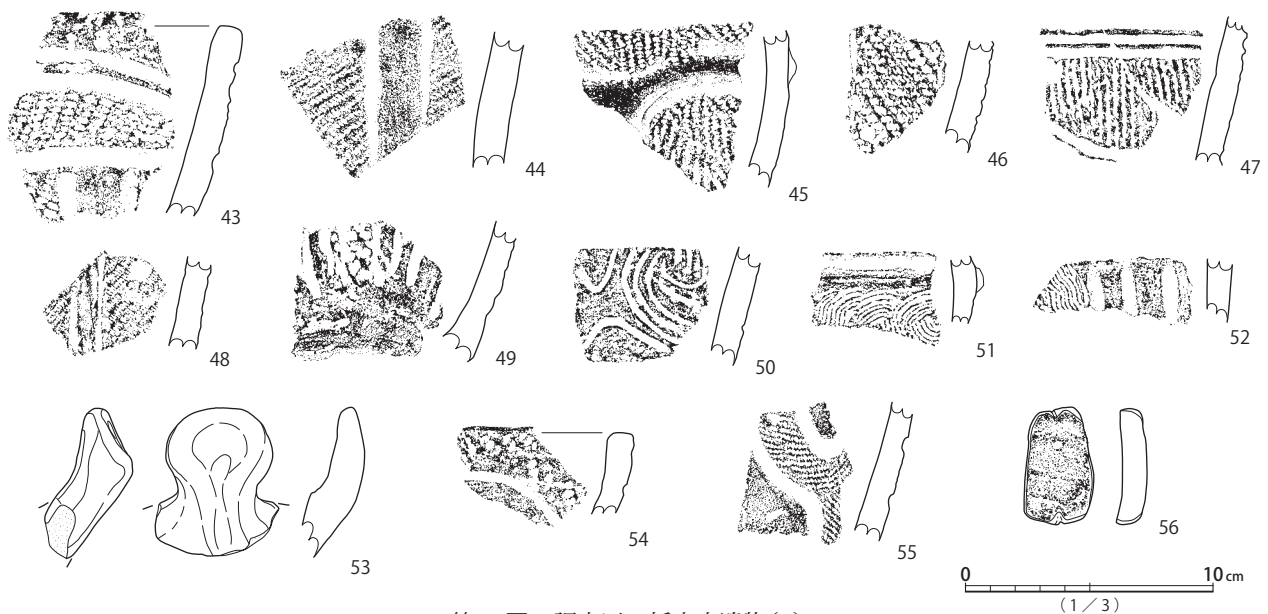
K2 出土遺物 (23~29)



第14図 K1・K2(樹木等痕跡)出土遺物



第15図 調査区一括出土遺物(1)



第16図 調査区一括出土遺物(2)

台式がこの遺構の周辺に多くみられた。しかし土坑覆土下層から中期後半の土器も多く出土しているため、中期後半の遺構と考えられる。

SK02 (第13図、図版3・7)

規模：1.08 × 0.81m **深さ**：42.0cm **主軸**：N-41°-W **出土遺物**：土器 525g(中期後半 443g、早期後葉 42g)・石 557.0g(黒曜石剥片 8点 3.0g、被熱礫 5点 554g) **所見**：SK04と同様な土坑であり、第13図3が出土していることから、中期後半の土坑と考えられる。

SK03 (第13図、図版3・7)

規模：0.96 × 0.82m **深さ**：23.4cm **出土遺物**：土器 69g(早期後葉 55g)・石 18.0g(被熱礫 1点 18g) **所見**：平面形は円形に近く底面が不整形であり、SK04やSK02とは形状が異なる。早期後葉の条痕文系土器のみが出土しており、SK02やSK04とは時期が異なる可能性もある。

SK05 (第3図、図版4) **規模**：1.06 × 0.82 m **深さ**：24.0 cm **所見**：調査区南東隅に位置し、遺存状態が悪い。覆土に若干の焼土を含んでおり、土坑の底面付近と想定した。出土遺物はない。

(3) ピット

SP01～SP06 (第12・13図、図版4・7・9)

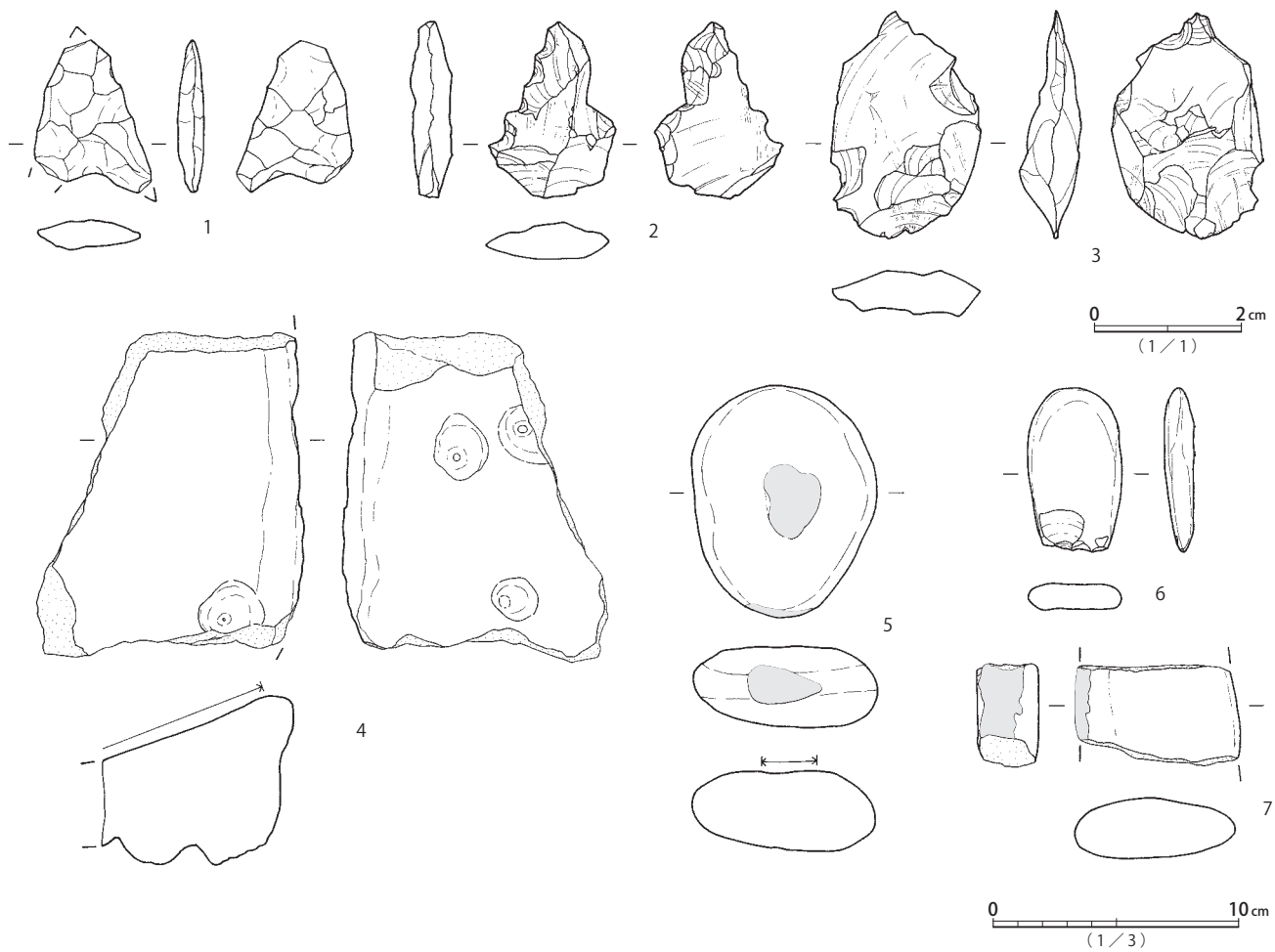
深さ：SP01 80.3 cm・SP02 64.7 cm・SP03 15.1 cm・SP04 16.8 cm・SP05 10.2 cm・SP06 10.2 cm

SK01周辺のピット群に個別の単独呼称をつけたものである。SP01とSP02は柱穴状である。

(4) 遺構外出土遺物 (第14～17図・図版7～9)

K1・K2 (第14図、図版5・7・8) 複数の遺構として掘り進めたが、いずれも土層は風倒木の特徴を示しており、結果としてすべての穴がつながるような状態であったため、樹木痕跡と考える。遺物は多く入り込む。第14図1は早期前葉、2・3・23は早期中葉、4・24は早期後葉、5～7は中期前半、8～21・25～29は中期後半、22は後期初頭の土器である。

第15～17図は調査区一括遺物である。第15図1は早期前葉、2～12は早期中葉、13～20は早期後葉、21は前期前半、22～30は中期前半、31～54は中期後半、主にEⅢ式新段階とみられ、55は後期初頭称名寺式期、56は土器片錐(重量17.0g)である。



第17図 調査区一括出土遺物(3)

第2表 石器観察表

図番号	番号	遺構	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g
9	41	SI01	石鏃	黒曜石	(1.56)	1.27	0.47	0.6
9	42	SI01	石鏃	黒曜石	(2.28)	(1.56)	0.38	0.9
9	43	SI01	RF	黒曜石	2.82	1.99	0.29	1.0
9	44	SI01	石斧	ホルンフェルス	9.6	4.9	2.2	114.6
9	45	SI01	敲石	砂岩	6.4	4.4	1.7	68.2
9	46	SI01 炉	磨石	砂岩	11.6	(4.3)	4.1	315.2
9	47	SI01	石斧?	ホルンフェルス	(4.6)	(3.3)	(1.3)	24.2
9	48	SI01	石斧?	ホルンフェルス	(8.0)	(5.4)	(3.9)	164.1
11	9	SI02	石鏃	黒曜石	(2.06)	(1.12)	0.41	0.8
11	10	SI02	磨製石斧	緑色岩	5.4	2.9	1.4	36.3
11	11	SI02	磨製石斧	輝緑岩	6.4	2.9	1.2	38.6
11	15	SK04	石斧	砂岩	7.5	4.1	0.7	68.1
12	7	SK01	敲石	石英斑岩(古期)	9.5	3.9	2.7	137.4
13	17	SP04	石鏃	黒曜石	1.82	1.25	0.30	0.6
13	18	SP04	敲石	ホルンフェルス	13.3	5.1	2.8	285.0
17	1	K3	石鏃	ホルンフェルス	(2.07)	(1.56)	0.40	1.1
17	2	K1	RF	黒曜石	2.37	1.71	0.53	1.5
17	3	調査区一括	RF	黒曜石	3.04	2.03	0.72	3.4
17	4	調査区一括	石皿	砂岩	(13.0)	(10.7)	5.8	990.7
17	5	調査区一括	敲石	溶結凝灰岩(古期)	9.4	7.3	3.2	311.3
17	6	調査区一括	石斧	ホルンフェルス	6.6	3.8	1.2	43.0
17	7	調査区一括	石斧?	砂岩	(4.1)	6.7	2.5	107.7

第4章 総括

今回調査の出土土器量は 66,042g であった。時期別に多い順でみると中期後半 50,883g、早期後葉 3,532g、中期前半 2,876g であり、次いで早期中葉 671g と続き、この地が中期後半に最も利用されていたことがわかる。早期後葉の土器片が予想外に多く出土したが、畑地の表面観察や 1 次調査時の出土遺物の情報にはみられないものであった。同様に早期前葉・前期関山式期・阿玉台式期の遺物も初見であり、今回調査区内において遺構は確認できなかったが、この台地上での断続的な土地利用が想定される。

土器の時期区分については、千葉県内のこの時期の土器を集成している加納氏の成果によった。今回の調査では、連弧文系の土器がほとんどみられないことが特徴でもある。そのような地域差がみられることに留意し、編年表の作成も含め、今後のこの地域の課題として捉えたい。

出土石量は 41,384.7g であり、掲載石器以外に黒曜石剥片 259 点 250.0g、その他チャート等石材剥片 14 点 94.6g、被熱礫 678 点 27,089g、自然礫 216 点 10,943g などがみられた。なかでも、黒曜石の製品が 6 点 8.0g に比して、剥片数が多くみられる。この傾向は 1 次調査でも同様であり、石鏃等の剥片石器の製作が行われていたことは確実であろう。SI01 覆土の厚さは最大でも 15 cm 程度であったが、91 点 63.3g の剥片が含まれていた。日程の厳しさもあり、剥片の分布点を示せない調査成果であったことは反省しなければならない。遺構外の被熱礫が多数検出される例は、早期・中期共にみられるものであり、今回は包含層も薄いため時期を分別することは困難であった。

また、SI01 にみられた特徴的な炉については、1 次調査時に検出した 3 軒の炉跡（いずれも大形土器を炉壁に据えている）と比較しても、異なる様相をみせている。使用時期は近いため、居住用と作業場など、用途が異なることも想定される。このような粘土を用いて炉壁を構築するスタイルは、少なくとも市域の当該期の集落にはみられない。

これまでの調査成果によって、市域北部の縄文時代中期には、中期前半期までの環状を意識した草刈遺跡のような大規模な集落の消滅とともに、後半期（加曾利 E III 式期～）からは小規模単位で分散居住する傾向を有することがわかってきている。その時期に具体的に何が起こったのかは判然としないが、現象として顕著にみられる。ただ、やや南に入った土器石遺跡（武士遺跡）では、第 1 章でも記したように当該期の竪穴建物跡が 77 軒、さらに南の久保堰ノ台遺跡では 30 軒超という調査事例がある。その画期は、大型集落の解体を示唆するのみではなく、より広範にわたるテリトリーの拡大の結果であるものとも考えられよう。小規模な分散型の集落に道具の製作跡などが多いのは、一時的な出張先としての基地的な役割を担っているからであり、今回の調査区もまた、そのような小規模な狩猟基地としての姿である。しかし、この台地全体をみると、大規模な集落の縁辺部における役割という位置づけになる。集落の全体像を考えていく上で重要な成果であろう。

参考文献

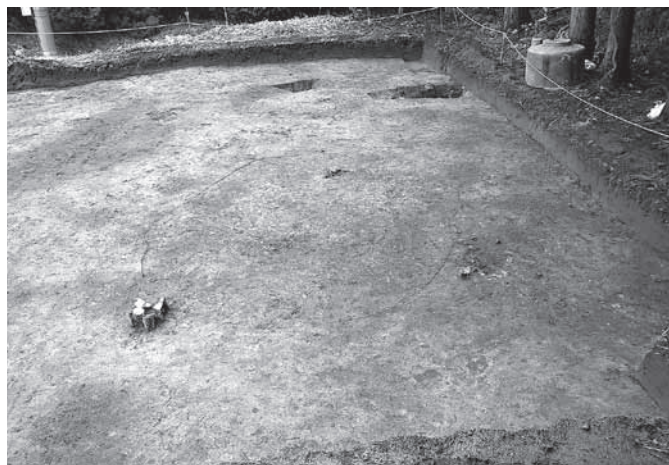
- 伊藤智樹 2005 『市原市石神台遺跡』財団法人千葉県文化財センター
大内千年ほか 2006 『潤井戸地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 市原市中潤ヶ広遺跡(上層)』千葉県教育振興財団
加納 実 1994 「加曾利 E III・IV 式土器の系統分析—配列・編年の前提作業として—」『貝塚博物館紀要第 21 号』
1995 「下総台地における加曾利 E III 式期の諸問題—集落の成立に関する予察を中心に—」
『研究紀要 16』財団法人千葉県文化財センター
1998 『市原市武士遺跡 2』財団法人千葉県文化財センター
西野雅人 2008 『縄文中期拠点集落の消滅と小規模集落』『千葉縄文研究 2』千葉縄文研究会



寺ノ台遺跡第2次調査区 北西から



遺構確認面 北西から



SI01・SI03周辺遺構確認面 北西から



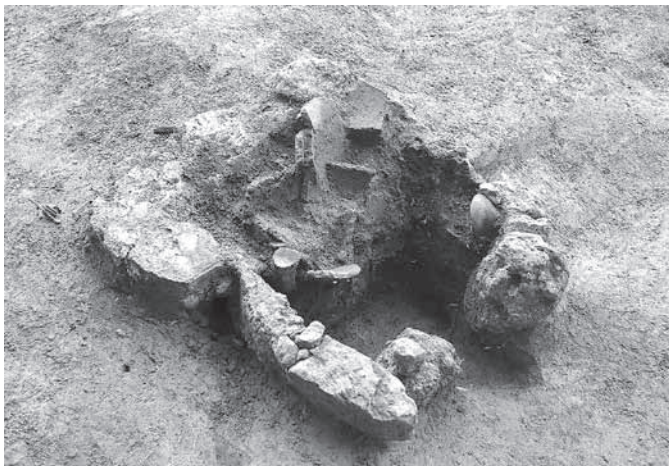
SI01炉付近遺物出土状況1 南西から



SI01炉付近遺物出土状況2 南西から



SI01・SI04 南西から



SI01 炉遺物出土状況 南西から



SI01 炉 南から



SI01・SI03・SI04 南西から



SI04 東から



SI02確認面 北から



SI02遺物出土状況 西から



SI02炉付近遺物出土状況 西から



SI02 北東から



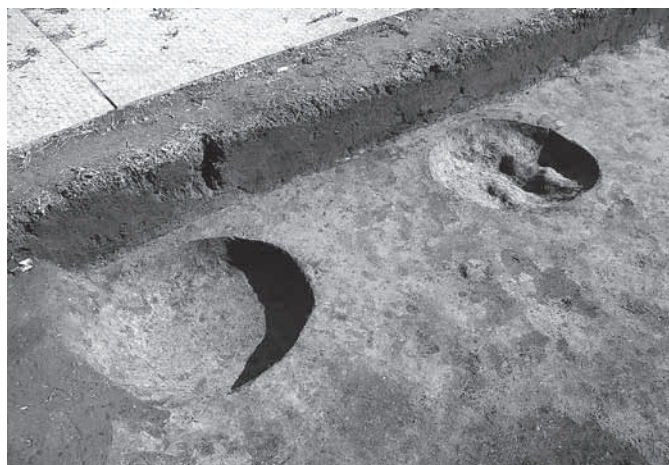
SK01遺物出土状況 南から



SK01 南東から



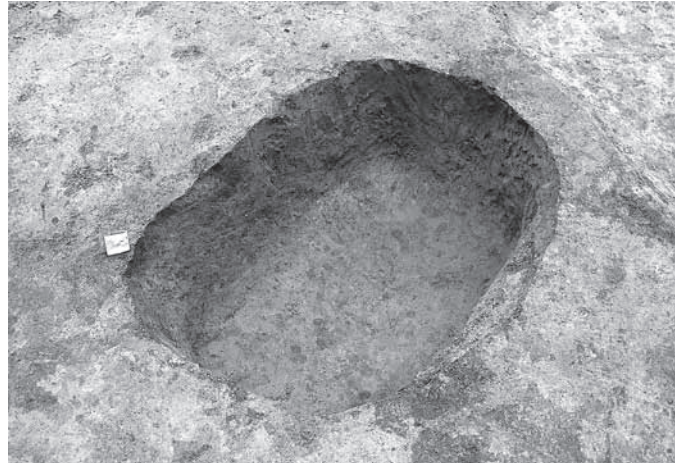
SK02遺物出土状況 南西から



SK02・SK03 西から



SK04土層断面 南西から



SK04 西から



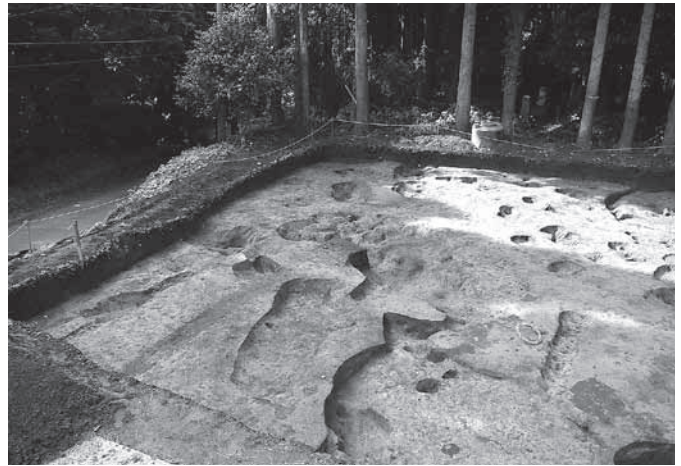
SP01・SP02 南から



K1遺物出土状況 北西から



調査風景 北西から



調査区南半(写真左端にSK05) 北東から



調査区近景 北東から



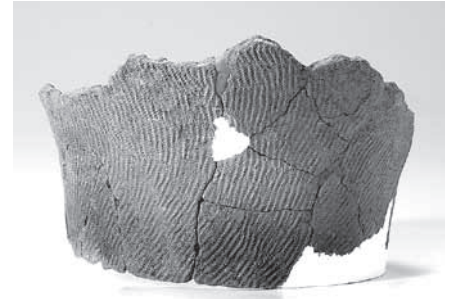
S101・S103・S104 北東から



SI01-23-2



SI03-32



SI02-3



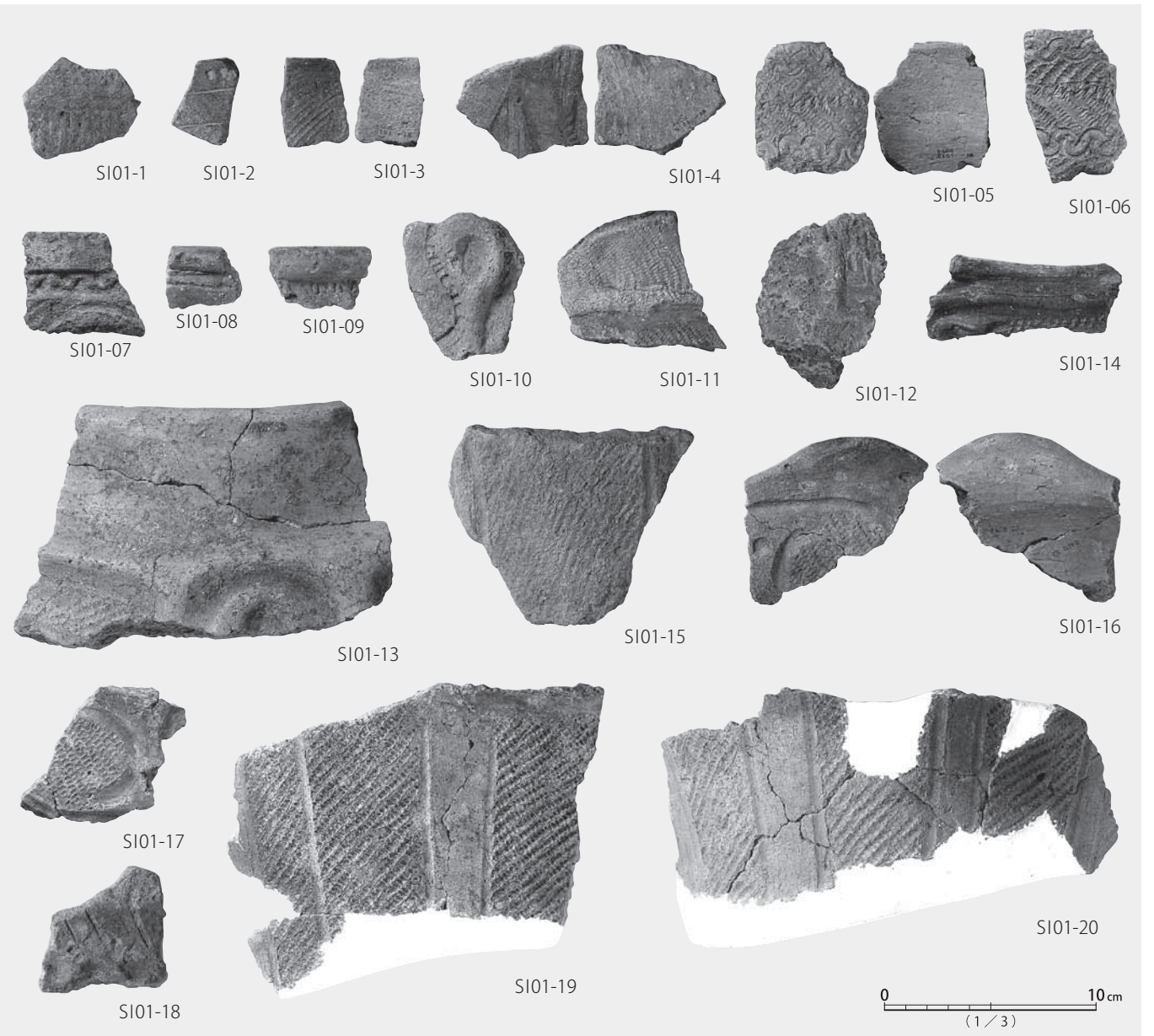
SI02-7

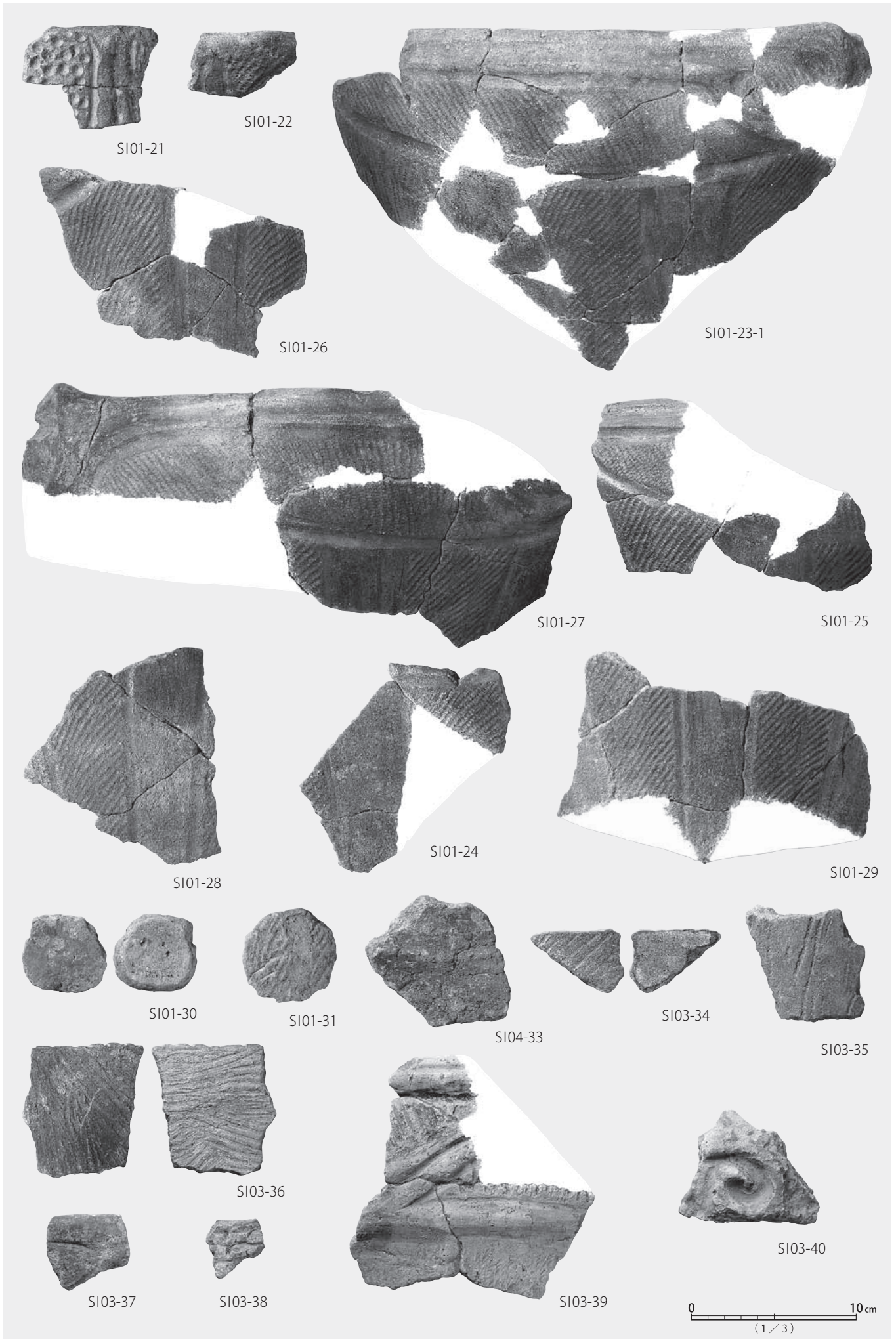


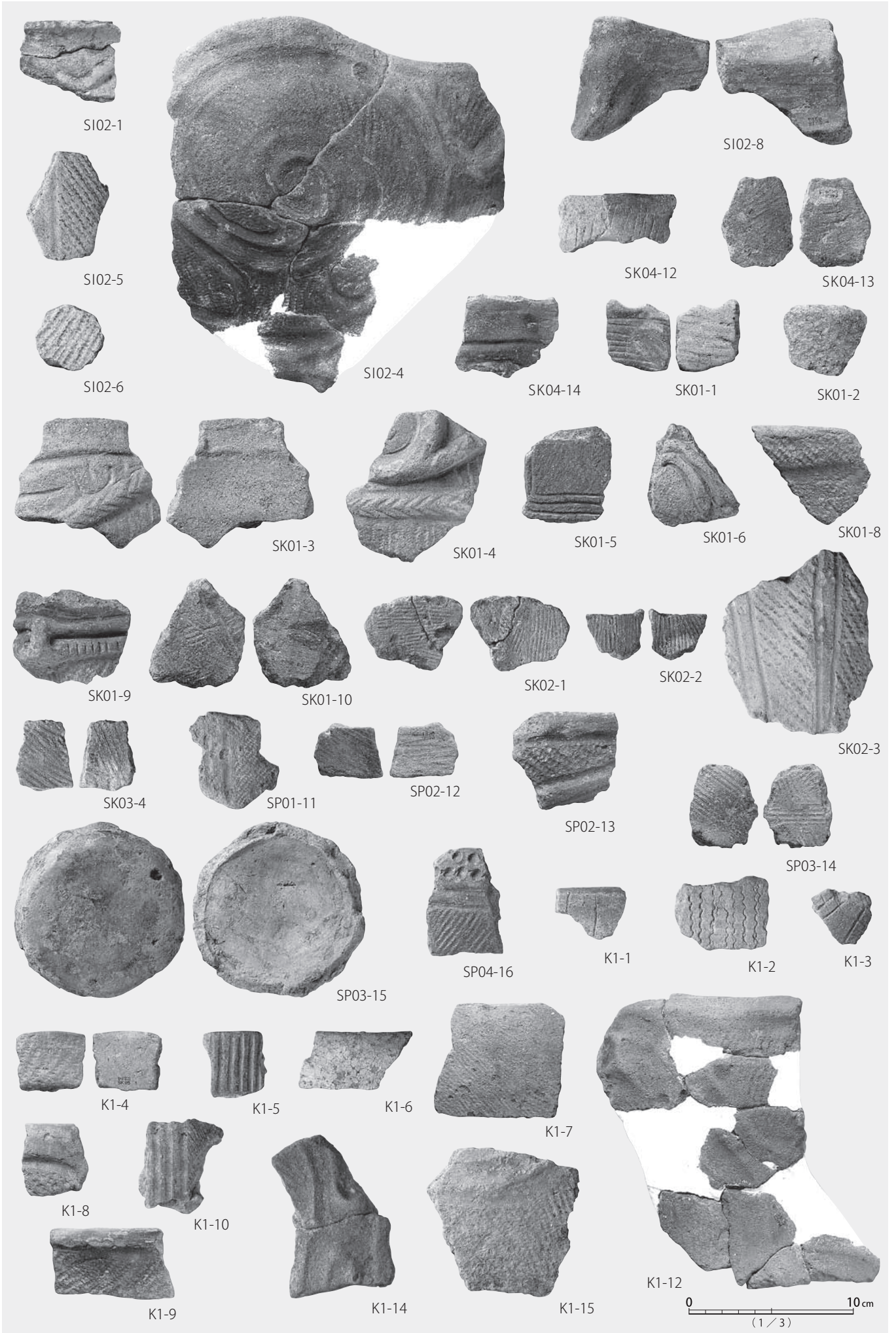
K1-11

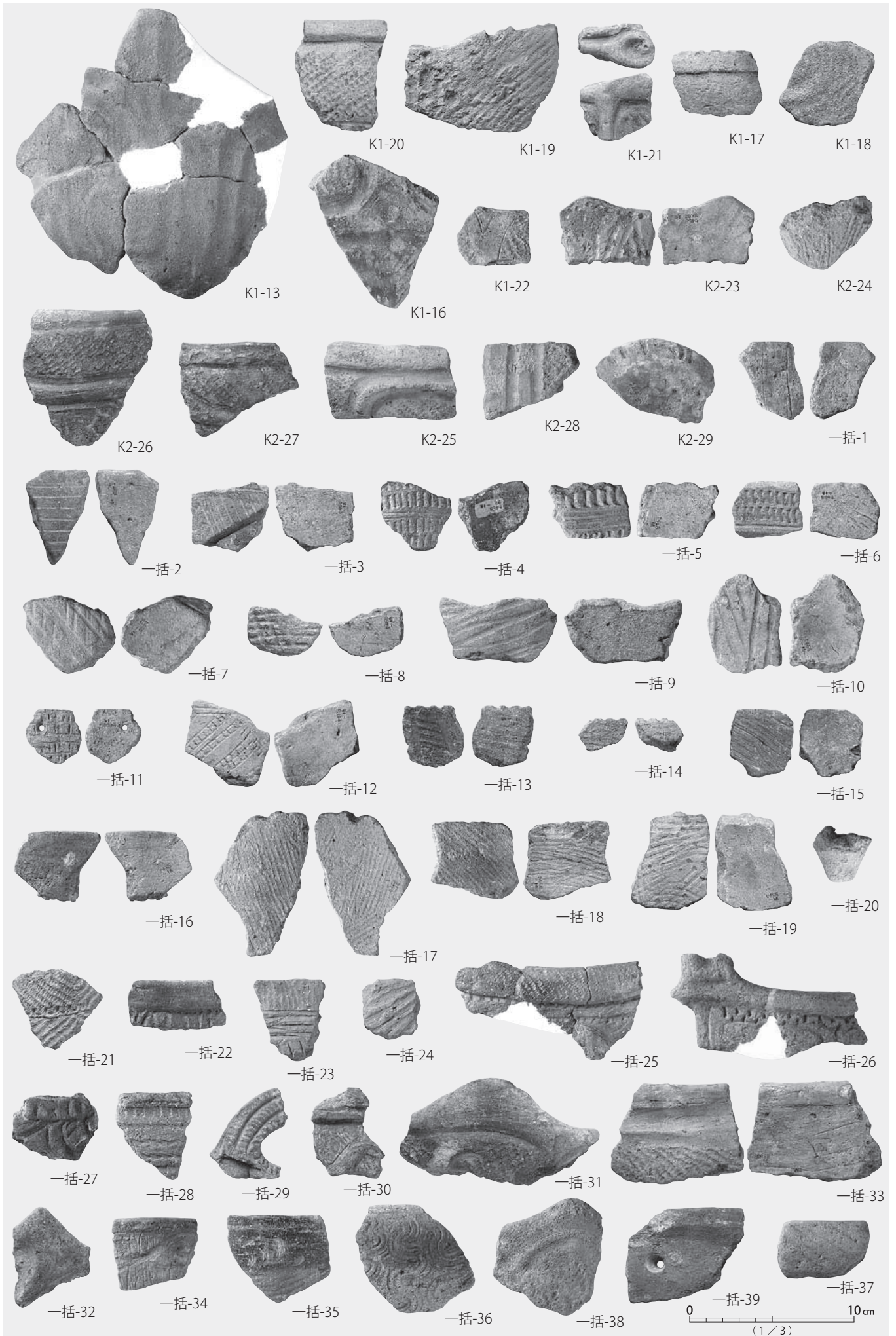


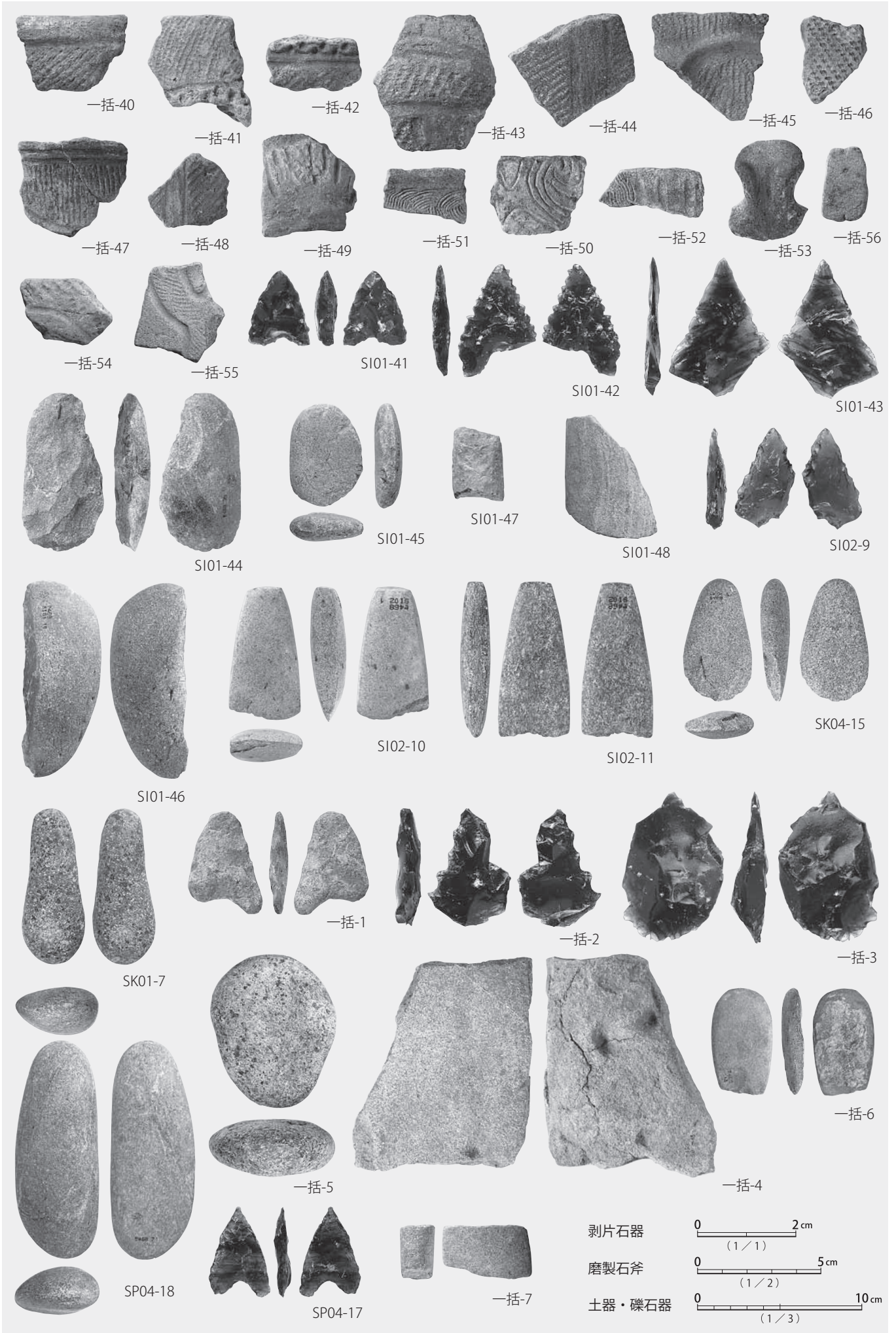
SI02-2











報告書抄録

ふりがな	いちはらしてらのだいいせきだい2じ							
書名	市原市寺ノ台遺跡 第2次							
副書名								
巻次								
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第21集							
編著者名	牧野 光隆							
編集機関	市原市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満 1489 番地 TEL 0436(41)9000							
発行年月日	2012年(平成24年)3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
てらのだい 寺ノ台遺跡	ちばけんいちはらしつきざき 千葉県市原市月崎 あざはつざき 字初崎 1093 番 1	12219	セ 468	35° 18' 19"	140° 08' 36"	20101020 ～ 20101111	158.76	携帯電話 基地局建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
寺ノ台遺跡	包蔵地	縄文時代	竪穴建物跡 4軒 土坑 5基 ピット 6基	縄文土器、石器、 土製品	縄文時代中期後半の 集落跡を検出した。			
要約	<p>遺跡は、養老川上流域左岸の標高95m前後の独立台地上に位置する。台地の平面形状は三角形を呈し、養老川と浦白川が合流する部分に独立している。付近の畑には縄文時代中期後半の土器片が多く散布し、1次調査区では大形の深鉢数点が出土している。今回の調査でも縄文時代中期後半加曾利EⅢ式期の遺物が多くみられ、当該期の集落が台地全体にひろがっていることが確認された。</p> <p>ただ、今回調査区の遺構はやや貧弱であり、黒曜石の剥片が多くみられるなど、狩猟基地としての季節的な土地利用が考えられる。早期中葉の沈線文系・後葉の条痕文系の土器も多くみられ、わずかながら前期の関山式期も混在していることから、想定よりも長期間にわたる土地利用が判明した。</p>							

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第21集

市原市寺ノ台遺跡 第2次

平成24年3月21日 発行

編集 市原市埋蔵文化財調査センター
千葉県市原市能満 1489
TEL 0436(41)9000

発行 K D D I 株式会社
千葉県市原市教育委員会
市原市国分寺台中央 1-1-1
TEL 0436(22)1111

印刷 株式会社 弘文社
市川市市川南 2-7-2